
とある何処かの学園都市（サイバーシティ）

鉢嶺来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある何処かの学園都市
サイバーシティ

【Nコード】

N9402L

【作者名】

鉢嶺来

【あらすじ】

学園都市の治安を維持する風紀委員。
ジャッジメント

主人公、黒田敏水もそんな中の一人だった。

ひょんなことから黒田は絶対能力者進化計画（レベル6シフトはいかく）の実験現場を目撃してしまい…？

禁書目録と超電磁砲の設定を使ったほとんどがオリジナルキャラで構成されてる物語です。原作が好きだとか上やんが登場しないと読まないという人はお戻りください。

あと魔術サイドのキャラも出てきません、あしからず。

7 / 15 完結しました。

1 話（前書き）

とある魔術の禁書目録の二次創作というよりも
とある科学の超電磁砲の二次創作と言った方が正しい気がする
ました（汗）

1話

8月も中旬を過ぎて茹だるような暑い夏が過ぎたような気がするが。

過ぎたと思っていたのはどうやら勘違いらしく高校を出た黒田は額の汗を拭った。

ちなみに絶賛夏休み中、仕事上の問題で黒田は登校したに過ぎない。

「あっちー…」

そう言って自販機の前で立ち止まり、『ヤシの実サイダー』を買う。

ガタン。という音がしてヤシの実サイダーが落ちてきた。

カシュッとプルタブを開けると腰に手を当てて一気に飲み干す。

「つかー！仕事途中での一杯は格別だな」

そう一人呟くと黒田はゴミ箱へと空き缶を捨てた。

…と、そこで一人の少女が目に入る。

格好からすると三沢塾の人間だろうか？

全身を安全ピンで留められた白い修道服を着た

妙に小さなその少女はおろおろとその場をいたりきたりしている。

黒田の仕事は風紀委員^{ジャッジメント}だ。

「まあ…何か困ってるようだし、仕事しますか」

そう言っただけ黒田は少女に近づく。

「お嬢さん、何か困りごとかな？」

少女は黒田に気付いて少し困ったような顔をしてこう言った。

「とうまがご飯を用意していつてくれなかったんだよ、おかげで今、私のお腹は猛烈に減っているのかも」

「当麻…？君の保護者かな？」

「とうまはとうまだよ、それよりもお腹が減ってるんだけど」

「お腹ね…どこに住んでるの？」

黒田はまるで小学生を相手にするかのようになんて優しく聞いた。

少女は少し黙ると指を北の方角に指さして「あっちだよ」と言った。

「歩いていける距離？」

「お腹が減ってなければ行けると思うかも」

黒田は少し溜め息をつくど、

「ここから少し歩くと駅があるから電車で帰って家でご飯食べな」

と言った。

すると少女は突然、顔が青ざめて

「で、電車はちょっと無理があるのかも…いまだに切符も買えないし…」

と少し俯いて呟いた。

電車に乗れない…？切符が買えない…？

おいおい、こいつどうやってこの学園都市で生活してるんだよ。

「はあ…ちょっと待ってな」

黒田は近くにあった移動式のアイス屋へと近づいてとりあえずミント味のアイス注文する。

アイスを右手に持ち、少女の下へと戻った。

その少女の目は既にアイスに釘付けであり、
今にも飛び掛からんという勢いで犬歯をむき出しにして黒田を見つめている。

「ほらっ、これ食ってそしたら家くらいまで持つだろ？」

「あ、ありがとう、君はまるで神様みたいな存在なのかも」

と少女は言うが早い。黒田から半ば無理やりアイスを踏んだくるとガジガジと音が聞こえそうな勢いで食べ始めた。

変なやつ…

黒田はそう思って時計を見る。

やべ…もうこんな時間か。

遅刻でもしようものなら固法に何て言われるかわからないからな。

「じゃあな、お譲ちゃん、ちゃんと帰れよ」

「うん、ありがとう」

そう告げると黒田は急ぎ早に風紀委員第177支部へと向かった。

ジャッジメント
- 風紀委員第177支部 -

超能力開発が日常的に行われている学園都市では能力者による犯罪が後を絶たない。

能力を使えない大人たちの集団、警備員では
とても全てに手が負えないため黒田のような学生が
半ばボランティアのような形で風紀委員として
学園都市の治安を守っている。

「あ、黒田先輩」

支部に入ると頭に花飾りを乗せた少女が挨拶してきた。

初春飾利。

身体的能力も低く、また身体検査システムスキャンの判定も低能力者（レベル1）
だが

情報処理能力が郡を抜いておりそれ一点のみで風紀委員として
合格したと言っても過言ではない少女。

頭の花飾りが何時も満開なのは何かこいつの能力なのだろうか？

黒田がそんな事を思いながら「ういっす」と軽く挨拶を済ませる。

自分のデスクにつくと

「何か問題でもあったか？」

と初春へ聞いた。

「いえ、今日のところはまだ何も」

初春の答えに少し満足そうに笑うと

「じゃあ、残ってる案件を片付けちまうか」

と言った。

黒田は自分のパソコンを起動すると残ってる案件のリストに目を通す。

ふと、ある案件で目が留まった。

レベルアップ
幻想御手事件。

木山春生が起こした事件で多人数の脳内を
ネットワークに接続して無理やり能力のレベルを底上げする。

と、掻い摘んで言うところだけだが実際には能力の底上げではなく共有であり

テストメント
AIM拡散力場と学習装置を利用したという結構複雑な案件だ。

案件にポイントを合わせてマウスを叩く。

事件に関わりのある案件が一覧ですらっとディスプレイを占拠した。

グラビトン事件。

使用者の昏睡。

木山春生の複数能力使用。

AIMバーストと呼ばれる怪物の出現。

学園都市第3位『超電磁砲』によるその破壊。

等等あったが、黒田が着目したのは一つの案件だ。

レベルアップ
幻想御手を用いて能力を上げた人物と風紀委員の交戦記録。

記録には交戦した際に老朽化したビルが一軒、崩れた…と記されている。

交戦したのは白井黒子。

この名前を見た時、黒田は盛大に溜め息をつくと頭をガシガシと掻いた。

…これは絶対に老朽化による倒壊じゃねえな。

あのじゃじゃ馬のことだ、どうせまた無茶苦茶な事して容疑者を確保したんだろう。

それにしても…まさかビル一軒倒壊させるとは…

そう思った時、初春が鳴り響いた電話を取った。

「はい…ジャッジメント第177支部です、はい、はい…能力者による盗難、ですか？」

犯人の能力とかは、はい、不明ですね」

話しながらパソコンのキーを叩く初春。

黒田もその画面を見つめる。

犯人の逃走位置がリストアップされる。

同時に近くにいる風紀委員ジャッジメントの位置も割り出された。

一番近くにいるのは… によりによってこいつか…

そこには「白井黒子」と書かれた文字が躍っていた。

「はい、では近くのジャッジメントを急行させますので、はい、よろしく願います」

そう言つて初春は電話を切る。

続けざまに黒子へと電話を掛けた。

「あ、白井さんですか？能力者による事件が発生しました。場所は…」

「あー、ちよつと待て、初春」

「はい？」

電話口に手を当てて初春は黒田を見上げた。

「俺が出張る、白井は待機させておけ」

手を当てていたのに関わらずその声が聞こえたのか電話から

『黒田先輩が来るんですの？わたくし一人で大丈夫ですから心配なく』

と聞こえた。

黒田は電話を初春から取り上げると

「バカ、お前の心配はしてないよ、犯人の身の安全と周りの建物の被害を心配してるんだ」

と目を瞑って言った。

『はう！な…なんのことが身に覚えがありませんすわ』

「いいから、一応ポイントは教えるが足止めだけでいいからな、絶対に交戦するなよ」

そう言つと黒田は犯人のポイントを伝えたと足早に支部が出る。

「…白井さん、また始末書書かされるのかなあ」

初春は大粒の汗を垂らしながら黒田が出てった扉を見てそう呟いた。

黒田は特に地図も携帯によるGPS端末も使用せずに真っ直ぐ目的地に向かって走る。

途中で鞆に入れっぱなしにして忘れていた風紀委員と書かれた腕章を右腕につけた。

「近いな…」

そう呟くと道を右折。

風紀委員は仕事柄、学園都市の道に詳しい。
ジャッジメント

黒田の頭には学園都市内の地図と犯人のポイントから最短のルート割り出していた。

走りながら黒田の顔が若干、曇った。

「あの大バカめ…交戦するなとあれほど言ったのに…」

黒子は犯人の前に立ち塞がっていた。

「けけけっ、ジャッジメントか！？可愛いジャッジメントだな！」

「あら、見た目で判断すると火傷じゃ済みませんのよ?」

「ムリムリ! 誰も俺を捕まえることはできねえよっ!!」

犯人が叫ぶと黒子へ向かってダッシュする。

犯人の拳が黒子に当たりそうになった瞬間、黒子の姿がその場から消えた。

「!?!」

犯人は辺りを見回す。

「こっちですわ」

犯人の後ろから黒子の声がした。

「テレポート空間移動っ!?!」

犯人の音がすると同時に黒子は蹴りの体制に入る。

そのままヒットすると思われた蹴りは犯人の体をすり抜けると空を切った。

ドゴン!!

黒子の横に犯人が立っていてその左拳が黒子の脇腹へと炸裂する。

「……っ!!」

痛みで顔を歪めながら黒子は後方にテレポートして、足にあるスリットから鉄の杭を取り出した。

そのまま犯人に向かって杭をテレポートさせる。

…が、何故か杭は全く別の位置に移動して地面へと落ちた。

この能力…

「けけけっ…残念だなあ、お譲ちゃん！いい能力だが相性が悪かったな!」

「その能力…トリックアート偏光能力ですわね」

「ほう…知っていたか、なら、テレポート空間移動では不利なことも知ってるだろ?」

「十二分に存じていますわ…でも引く気は全くございませんのであしからず」

そう言っつて黒子は辺りを見る。

交戦を始めてから人通りが少なくなつたとは言え、前回戦ったときの様な廃墟での戦闘ではない。

ビルの倒壊などの強引な手段は使えない。

さて…どうしたのですかね…

そう思った時、黒子の後ろから聞き覚えのある声が響いた。

「そこまでだ、白井、下がれ」

黒田が立っていた。

「…黒田先輩？」

「交戦はするなと言っておいたはずだが？」

「交戦しないと逃げられてしまいますので…それより」

黒子は心底嫌そうな顔をする

「先輩は情報処理が主でございしょう？何故に前線に出てくるのですか？」

と聞いた。

「お前が無茶するからだ、こいつを片付けたらこないだのビル倒壊の件に

ついて詳しく聞きだすから覚悟しておけ」

その黒田の言葉に黒子はげっ…と唸った。

犯人はニヤニヤと笑みを浮かべると

「おいおい、今度は強そうな兄ちゃんじゃねえか、
まあ、俺に攻撃を当てるのは不可能なだけだよ」

と言った。

「不可能かどうかはやってみてから決めるさ」

黒田はそう言うとおもむろに犯人へ向かって走る。

犯人はニヤリと笑ったまま微動だにしない。

と、黒田は右前方の何もない空間を蹴った。

ドッ！

と鈍い音がして何も無かった空間から犯人の姿が浮き彫りになる。

「て…てめえ…っ!？」

「どうした？攻撃を当てるのは不可能なんじゃなかったか？」

そう言つと再び構えを取る黒田。

「相変わらず…性質の悪い能力ですわね」

黒子が黒田を見て呟いた。

黒田の能力は座標把握。
ポイントゲッター

相手の位置をまるでカーナビのように知ることが出来る能力だ。

能力の特性上、ジャッジメント風紀委員の仕事は
情報処理が多いが身体的能力も総じて高い。

つまり姿を消したり、光や空間を歪めて誤認させたり、
瞬間移動で移動する相手の位置が手に取るように分かる。

攻撃的に特化した能力ではないが
黒子や犯人のような能力者にとってはこれ以上やり難い相手はい
なかった。

「俺が位置を誤認するなんて思ふなよ、一応、これでも大能力者（
レベル4）だからな？」

そう言つと黒田は再び犯人を蹴る。

今度は左後ろの空間を。

犯人は鳩尾に蹴りがクリーンヒットして思わずその場で鳴咽を漏らした。

周りの光の歪みが消えて犯人が目視出切るようになる。

身体的ダメージが蓄積され演算まで頭が回らなくなったのだろう。

黒田は懐から手錠を取り出すと犯人の両手にかける。

そのまま携帯を取り出し電話をした。

「あー、初春か？犯人を確保、アンチスキルに連絡を頼む」

簡潔に用件だけ述べると電話を切る。

「…さて、白井？」

黒田の言葉に黒子のツインテールが思いっきり宙へと逆立った。

「さっきの件、支部でたっぷり聞かせてもらっからな？」

「は…はは…」

「言つとくが、テレポートして逃げようとしたらその先に石投げつけてやるからな」

「…わかりましたの」

黒子は観念したかのように呟くのがつくりとうな垂れた。

ああ…今日はこの後お姉さまと久しぶりのショッピングの予定でしたのに…

それもこれも黒田先輩を引き止めなつた初春が悪いんですわっ

覚えてらっしゃいよ、う・い・は・るゝ

完全な逆恨みに闘志を燃やす黒子。

黒田たちは警備員が到着すると事後処理を任せて支部へと戻った。

アンチスキル

「…で、ビル倒壊は間違えなくお前がやったんだな？

それも、犯人だけならともかく一般生徒が近くにいる状況で」

「ですが、先輩、ああしないとわたくしも佐天さんもやられていたのですのよ？」

「それは結果論だ、ジャッジメントとして現場での独断専行がお前は多すぎる。やり方も乱雑、何より」

そう言つと人差し指を立てる黒田。

「お前には危機感が足りない」

「うつ…」

「猪突猛進すぎんだよ、お前は、いつも超電磁砲のお嬢さんや俺た

ち風紀委員の仲間が側にいると思うなよ?」

「はいですの」

「わかればいい、で、だ」

そう言つと黒田は書類の束を黒子に渡した。

「…なんですよ、この書類の山は」

「ビル倒壊についての始末書だ」

「…げっ」

「今日中に書いておけよ、後でちゃんとチェックするからな」

「あゝ…でも寮の門限がありました」

黒子は冷や汗交じりで言い訳をすると

「門限までに書き上げれば問題ないだろ?」

とぴしゃりと言われて撃沈した。

黒田は自分のデスクへと戻る。

ふうっと溜め息をつく横からコーヒーマシンが差し出された。

「お疲れ、敏水」

「おう、固法か」

固法はコーヒーを黒田に渡すと

「お互い白井さんには苦勞するわね」と言い残してその場を去った。

全く、だな。

横目でちらりと黒子を見ると始末書と格闘している黒子の姿が映った。

1話（後書き）

あらすじにも書いてますがネタが熟成してない

（というよりも1話分しか浮かんでない）状況での

投稿になるのでもしかしたらすぐに完結扱いになるかもしれない。

続くとすれば次は絶対能力進化実験（レベル6シフト）に関する話になると思いますけど…未定です。

第1位と第3位（前書き）

続けます、が相変わらずネタは頭の中だけで紙に捻出していないため途中から崩壊の危機がありますw

6 / 1 4 午後9時、誤字修正

6 / 1 5 一通の台詞のヨをよに修正

第1位と第3位

8月17日。

黒田はスーパーの卵売り場の前で座り込んで
右手にLサイズ8玉入り138円のを
左手にMサイズ10玉入り118円のを
それぞれ手にとって真剣な目で交互に眺めていた。

学園都市は月に一度、学園都市側から学生へ自動的に
お金が振り込まれる仕組みになっている。

それは通っている学校や本人の身体検査など
システムスキャン
によって割り出される能力値などから人によって十人十色である。

仮にも黒田は大能力者（レベル4）の能力者だ。
学校も上の下くらいのランクの所に通っているため、恐らくはそ
こら近辺を歩いている
学生なんかよりは遥かに金を持っている。

だが黒田はお金を持っている。贅沢をしてもいい、とは考えてい
ない。

もちろん、使うべきところには出し惜しみはしない。
が、節約すべき部分とはことん節約するべきだ、という思考の持
ち主だ。

手に取って10分くらい悩んだらどうか。
黒田の出した結論はこうだ。

選択肢3・Sサイズ12玉で98円のものを買う。

そう思って二つを棚に戻し、Sサイズのパックの卵を手を取った。

「ちょっと敏水、10分も悩んだ挙句に別のを買っわけ？」

そう黒田の後ろから声をかけてきたのは緑色の髪をポニーテールに束ねた女子高生だ。

「五月蠅いな、美沙、俺は今重要な選択を迫られてるんだぞ」

黒田は後ろを振り向かず緑の髪的女子高生、立川美沙たちかわみさにそう言った。

「付き合うほうの身にもなってよねー、

スーパーで卵を持って10分悩むとかこの主婦ですか？貴方は」

「黙れ、計画性を持たない行動を取って何がジャッジメントだ、

俺は学生の見本となる生活を送りたいだけだ」

相変わらずクソ真面目な性格：

まあ、そこがこいつのいい所でもあるんだけど、悪い所もあるのよね。

そう思うと美沙は、はあ、と軽く溜め息をつく。

「よし、決めたぞ、行くぞ美沙」

そう言って黒田はSサイズのパックの卵を持ってレジへと直行した。

黒田が会計を済ませて二人は連れ立ってスーパーを出た。

「ねえねえ、敏水、何か冷たい物食べて行こうよ」

「悪いがこれから仕事だからな…」というかお前もそうだろうが…」

美沙も黒田と同じ風紀委員ジャッジメントである。

尤も、支部が違うので仕事に顔を合わせることは少ないが。

小学低学年の頃は黒田と美沙、固法の3人でよく連れ立って遊んだものだっただ。

小学5年から3人は風紀委員ジャッジメントになった。

固法と黒田は同じ支部に配属されたが美沙は違う支部へと配属になった。

「私だけ仲間はずれになったー」と言ってえんえんと泣き喚く当時の美沙に対して黒田は離れてても友達だから、と言った覚えが今もある。

そして、何の因果か知らないが中学2年の頃から

何とも無く会う機会が増え、何故か何時の間にか休みの時間はほとんど何時も一緒にいる、というのが当たり前になっていた。

突然、黒田の携帯が鳴った。

携帯を取り出すと素早く黒田は液晶に映し出される文字を確認。

- 第177支部 - と書かれたそれを目に通すと通話ボタンを押して耳に当てる。

「うわ、敏水、あんたまだそのタイプの携帯使ってるの？時代遅れもいい所じゃない」

黒田が使ってる携帯を見た美沙が率直な意見を述べる。

学園都市は他の地域と比べて20年ほど科学の技術が抜きん出ている。

そのため携帯も小型化や軽量化、果てはそれを追及しすぎたために逆に使えないという本末転倒なデザインのものまで多種多様だが黒田が使ってるのは「外」の世界でも普通に売っていきそうなシンプルな黒い折りたたみの携帯電話だった。

ほっとけ、と心の中で呟きながら「俺だ」と電話に向かって喋る。

『あ、黒田君？悪いんだけどさ、人探しの仕事手伝ってくれない？』

「人探し？何歳くらいで性別は何だ？どこら辺にいるのかわかるのか？」

電話先の相手はやる気の無さそうな声で返事を返してきた。

『年齢は8歳、女の子、名前は才音遥さいねはるか、どこら辺にいるか知ってたら黒田君に連絡しないわよ』

「わかった、ちょっと待ってろ」

そう言うと黒田は能力を使用した。

黒田の能力、ポイントゲッター座標把握は半径10km以内の人、物の位置が正確に読み取れる能力だ。

人は性別と年齢、現在の生命反応の量、物は「何製」で出来ているかまでを知ることが出来る。

能力使用距離半径が後40km伸びれば

超能力者（レベル5）に届く、と教師のお墨付きを貰うほど誤差やブレも無い。

黒田はその能力で見つけた人物を電話先の相手へ告げる。

「該当する人間は26人だ、全部のポイントを知らせるか？」

『OK、メモするから待ってて…といいよ』

確認すると黒田はスラスラと該当ポイントを淀みなく伝えていく。

…と、言葉が止まった。

何だ…この反応？

近い、1km圏内のこの近くで男と女が一人ずつ立ってる。

別にそこまでなら何の問題もない。

ただ、気になるのは、女の生命反応が著しく弱くなっていること。

「済まないな、別件だ、今までのポイントで居なかった時はお前らで探してくれ」

『ちょ！黒田君！？』

プツツと半ば問答無用で黒田は携帯を切った。

「美沙は先に89支部に行ってる」

「何か見つけたの？」

美沙が怪訝そうな顔をして黒田を問い詰める。

「別に：ちょっと、気になるだけだ、職業病だなこれは」

美沙はその答えを聞くと、

別段何時も通りの黒田だな、と思い「わかった」と頷くとその場から消えた。

美沙の能力は黒子と同じ空間移動タイプの能力。

黒子と違う点は対象物に触れなくても物を移動させられること。

同時に移動できる最大物量は300kg、人間にすると大人の男5人ほどだろうか。

移動量は黒子とそんなに変わらず50m前後（精神状態によって上下はある）。

空間移動タイプの能力者はその絶対数が少ない。

学園都市280万いる学生の中でもその数は48人ほど。

黒子や美沙と同等クラスとなると一桁まで下がるのでは無いだろうか。

事実、支部が違う黒子は美沙の存在を知らない。

というよりも仮に知ったら全力で黒田のことを

冷やかしに来ると分かっているので黒田はあえて言っていない。

美沙は黒田と同じ大能力者（レベル4）、

こちらにも移動量と物量がもう少し増えれば超能力者（レベル5）になれる、と言われている。

教師はことも無く「もう少し増えれば」と言うが、その「もう少し」と言うのが

大能力者（レベル4）と超能力者（レベル5）の

一種の壁であり二人の目下の共通の目的はその壁を越えること、である。

黒田は美沙の反応が点と点になりながら

自分の範囲外へ消えることを確認しながら目的のポイントへと走った。

そこは土手だった。

近くには川がサラサラと流れていて、取り立てて不思議なことは無い。

一点、気になる所は途中にあった「これより先、立ち入り禁止」のプレートの存在だ。

黒田はそのプレートを見ると風紀委員の
腕章を素早く取り出して右腕につけた。

風紀委員はその仕事上、立ち入り禁止区域にも入れるようになる。
…もちろん、禁止されているレベルによる、が
プレートが立っているだけのお粗末な立ち入り禁止区域は
入ったところで特に問題視されることではない。

黒田は弱っている女の示す地点を見る。

そして、何よりもその姿を見て驚いた。

風紀委員として最低限覚えておかなければ
ならないこととして挙げられる項目の一つに
7人の超能力者（レベル5）の顔写真と能力、というものがある。

そしてその女の顔は見間違えるはずも無く、
学園都市第3位『超電磁砲』、御坂美琴の顔だった。

能力者同士の喧嘩だろうか？

それにしたって、学園都市第3位『超電磁砲』である。

並の相手なら触れることすら敵わず即ノックアウトだ。

しかも何故か手にはどこから手に入れたのか分からないマシンガ
ンで装備を固めて
頭には変なゴーグルを着けていた。

超電磁砲の力があればあんなちんけな武器なんぞよりもその能力の方が殺傷能力が高いはずだ。

意味が分からず、黒田は今度は生命反応がやけに強大な男の方を見た。

そして戦慄した。

その華奢な銀髪の男は学園都市第1位、アクセラレータ一方通行だったからだ。

記憶が確かなら能力はベクトル操作。

触れたもののベクトルを操り、

相手に反撃をも許さず指先が軽く相手に触れただけで人を殺せる。

悪魔の能力の持ち主。

第1位と第3位が何故こんな所で戦っているのか分からない、が今確実に分かるのは、「今、ここでこの戦いを終わらせなければ第3位が死ぬ」という事実だった。

黒田は携帯を素早く取り出すと支部へと連絡する。

『はい、ジャッジメント第177支部です』

「初春か、俺だ、黒田だ」

黒田は土手にいる二人から目を離すことなく出来るだけ小さな声で話す。

『黒田先輩？どうしたんですか??』

「至急、応援を頼む、多ければ多い方がいい、場所は第7学区のポイントX027・Y185地点、早くしろ、下手すれば死人が出るぞ」

黒田の声、特に「死人」という単語に若干惑いを覚えながら初春は「は、はい！」と言って電話越しにパソコンを操作する音が聞こえた。

そして10秒後、返ってきた答えは黒田の予想を遥かにぶっ飛んだ答えだった。

「せ、先輩！駄目です、統括理事の方から申請が却下されました、先輩も至急戻るようにと…」

「…バカな」

黒田は思わず携帯を落としそうになった。

死人が出るかもしれない、と黒田は確かに伝えた。

なのに学園都市のトップが自ら申請却下、だと？

このポイントで何が起きてるんだ…？

黒田はおもむろに携帯の電源を切る。

今、自分に出来ることはなんだ…？

二人の超能力者（レベル5）の戦いに割って入って無事に済む訳

が無い。

だが、このままでは確実に第3位は殺される…

そう思った時、第3位のマシンガンが火を吹いた。

第1位の肩口に当たったかと思われた弾丸は全く同じスピードで反射されて

第3位の肩口を貫く。

苦痛にマシンガンを落とし、その場を後ずさる第3位。

黒田は考えるのを止めて現場へと走っていた。

バカか…俺は、先日白井に独断先行はやめろと言ったばかりだ。

だが、このままでは第3位は確実に殺される。

黒田は第1位と第3位の間に割って入るように立ち塞がった。

「…止める…一方通行…ジャッジメント、だ…それ以上は暴行罪としてお前を拘束する」

第1位の銀髪の少年は突然の乱入者に人よりも小さな目の玉を若干開くと盛大に笑い出した。

「ヒヤハハハッハハハッハッハッ！正義の使者、
ジャッジメントだってかア？三下がこの俺の実験の邪魔してんじ
やねエよッ！！」

「…実験、だと？」

黒田は自分でも声が震えているのが分かった。

ある動物は本能的に捕食される側と捕食する側が分かるようにな
っている。

「それ」が黒田にはわかった。

今、自分は捕食される側の立場だと、はつきりくつきり鮮明に脳
内に浮かび上がった。

止めに入っただけでいいが、このままじゃ十中八九殺される。

触れられるだけで殺される、
こちらから攻撃してもそれだけで全身の血管が破れ、内臓が破裂
して死ぬ。

目の前の華奢な少年からはただ「逃げる」しか術は無い。

それが学園都市の暗黙のルールだ。

触れてはいけない者。一方通行。アクセラレータ

通り名の通り、本人が通って来る方向からは誰も通って来ない、
否、来れない。

全身を粟立たせながら、黒田は後ろにいる第3位の少女に声をかけた。

「大丈夫か…？」

しかし、その黒田に返ってきた答えはまたもや黒田の予想を斜め上に行く。

「何故…邪魔をするのですか、とミサカは簡潔に答えを求めます」

第3位の少女は表情を変えず、傷口を塞ごうともせず、ただそう淡々と言った。

白井黒子から聞いている超電磁砲のイメージと全く違う。

何だ…何が起こっている…？

「…何なんだ、お前らは…実験とは何だ…？」

「あア？さあねエ、メンドクセエから教えねエ」

銀髪の第1位は場がしらけた様にそう言っただけで地面へと唾を吐いた。

「…あんたも同意見なのか？超電磁砲のお嬢さん…」

黒田は第1位の少年から視線を外さずに第3位の少女へと問いたです。

「…………… Z X C 7 4 1 A S D 8 5 2 Q W E 9 6 3 , とミサカは符丁^{パス}の確認を取ります」

Z X C 7 4 1 A S D 8 5 2 Q W E 9 6 3 , : ; ?

聞いた事もないパスだった。

「…それは、何のパスワードだ？」

「確認が取れませんのでその質問にはお答えできません、とミサカは懇切丁寧に説明します」

「…このままじゃお前はこいつに殺されるんだぞ？」

「ウダウダうるせエんだよ…三下が、そいつの死は確定事項なんだよ、」

必須なんだよ、いいぜエ？

止めたきや止めてみるよ、この一方通行をよオツ！！
アクセラレータ

そう第1位が言った瞬間に第1位の足元の地面が捲り上がって黒田に迫ってきた。

第1位と第3位（後書き）

えらく中途半端なところで終わってごめんなさい（。ー。；A
仕事忙しいのと今月中にクリアしたいゲームが（こっちが本命）

ところで…空間移動能力者の数って48人であってましたっけ？

W
W

第1位と第3位 - 2 - (前書き)

オリキャラばかり出してると二次創作としてこれどうなん
でしょう？ww

第1位と第3位 - 2 -

競りあがって来る物体は無機物の集合体、スピードは尋常じゃないが避けられないって程では無い…！

黒田は迷わずに一方通行アクセラレータに背を向けると第3位の少女を抱えて横へ飛んだ。

間一髪のところまで競りあがる土砂を避わず。

黒田はそのまま一方通行アクセラレータを見向きもせず、走る。

まともに戦っても勝ち目はない。

なら、せめてこの第3位だけでも確実に逃がす…。

「なに、逃げる気まんまんなんだよ、逃がすと思ってんのか、こらア…！」

アクセラレータ

一方通行は足元にある砂利を

一粒拾ってそのままベクトルを操作して黒田へと飛ばす。

飛んでくるのは無機物、座標、速度からして2秒後に俺の心臓に当たる…完全回避は無理、致命傷を避けるくらいしか…！

黒田は微かに上半身をずらした。

砂利は心臓の軌道上から外れて黒田の右肩に当たる。

そのまま右肩を貫通して勢いよく出血した。

……だが黒田は止まらない。

不思議そうに自分の顔を見る第3位を抱えながら尚も懸命に走る。

「上手く致命傷を避けるじゃねエか、それがお前の能力かなンかかア？」

ドン！と一方通行は地面を踏んだ。
アクセラレータ

大量の土砂が舞い上がり、そのままそれらは黒田へと襲う。

また無機物……まあ、この辺にはそれしか無いからな、だが……数が
多い、避けきれない……！？

黒田がそう思った時、ビュンと言う音と共に黒田の背後に分厚い
コンクリートの壁が出現した。

何だ……？俺の後ろにデカイ無機物が突然……！？

土砂は残らず無機物に当たり防がれる。

「テレポートオ？それがテメエの隠し玉かア？
上手く避けてたのはジャツジメントなりの勘かなンかかよ！」

アクセラレータ
一方通行の両足がまるで

ロケット砲のように噴射してコンクリートの壁に向かって右手を

突き出す。

コンクリートの壁はいとも簡単に粉碎された。

まるで一度積み上げた砂山を楽しさ半分に崩す

子供のように一方通行はコンクリートの壁を崩す。

と、そこで一方通行は気付く。

目の前にいるべき二人の姿が無い事に。

逃げられた…だア？

壁は自身を移動させるための目晦ましか、中々判断力のある奴だ。

今まで自分と戦ってきたクスどもは

自分を殺して名を上げようとするバカばかりだったがあいつは違う。

逃げることだけを考えて行動していた、

はっ、風紀委員としての誇りってやつかア…？

一方通行は少しイラついた顔をしたがすぐにどうでもいいような顔に戻り、

「まア…順番通りに殺せとは言われてねエし、あいつは最後でいいか…」

そう呟くと川原を後にする。

コンビニでコーヒーでも買って帰るか…

そんな事を思いながら一方通行は街の方へと消えていった。
アクセラレータ

どこかのビルの屋上。

そこに黒田と第3位の少女が何時の間にか座り込んでいた。

「……………」こは？

「あんた、こんな無茶するようなやつとは思わなかったですけど？」

聞き覚えのある声の方を見ると美沙が立っていた。

心なしに怒っている、ように黒田には見えた。

「その第3位の子を助けるにしたって

応援呼ぶとかあったでしょうに、何で一人で突っ込んだ訳？」

「応援なら呼んだよ、いの一番に」

「え？」

「だけど却下された、信じられるか？却下先は統括理事だ、何か知らないがとんでもないプロジェクトか何かに関わっちまったらしいぞ、俺は」

と、そこで気付いた。

何で美沙が俺の状態を知ってて助けを出せた？と。

「…美沙」

美沙は黒田の呟きにアイコンタクトで応えると右手で自分の後ろを指す。

美沙の指す方向を見ると赤い髪の少年が黒田を見ていた。

「…峰岸、か」

みねざしりょうすけ
峰岸亮輔、高校1年生。

身長が僅か142cmしかないのがコンプレックスで中学の時から美沙の同級生。

サイコメトリー
能力は読心能力。

能力を使用している対象者を限定としてその人物のあらゆる思考を読み取る能力の持ち主。

能力を使用中、という条件下の下ならその距離に制限がない。

但し、一度に読める人数は一人まで。その持続時間は30分が限度だ。

能力値は大能力者（レベル4）で美沙と同じ89支部の風紀委員だ。ジャッジメント

「僕は恋敵である貴方に死んでもらっても一向に構わないんですが、貴方が死ぬと美沙さんが泣く、それは好ましくないですからね」

峰岸はニヤリと笑って黒田に言った。

「一応、感謝しておく」

黒田はそう言うのと右肩を抑えながら、立ち上がった。

「…立てるか？」

そう言うって黒田は第3位の少女の手を取る。

「特に問題はありません、
とミサカは自分の肩口の出血が割りと酷いことを我慢しながら呟きます」

「やせ我慢してるんじゃない、全く…美沙、悪いけど病院近くまで
テレポートできるか？」

「それはいいけどさ、その子、本当にあの超電磁砲？何かデータと
全く違うない？」

美沙の問いに峰岸が冷たい、心底冷たい目線で第3位の少女を見た。

「読みますか？」

その峰岸の問いに黒田はやや、間を空けて、

「いや、今はいい、とりあえずは怪我の治療が先だ。美沙、頼む」

「はいはい、心優しい美沙ちゃんはちゃんとわかってますよ、あんたも急所は外れてるとはいえ、それ相当の深手だし」

そう言つと四人の姿がビュンと言つ音と共に消える。

カエル顔の医者性格はちよつとあれだが腕は確かで仕事柄、黒田たちも何度か世話になったことがある。カエル顔の医者は第3位の少女の傷を手当した後に黒田の傷口を見た。

「これは酷いね、どんな銃弾で撃ち込まれたんだい？」

カービン銃クラスの銃弾じゃないと肩と骨を

貫通するなんてないはずだけどそれにしても傷口が小さすぎるし」

「銃弾じゃないです、一粒の砂利ですよ、俺の肩を貫いたのは」

「そんな能力者とバトルしたの？仕事とは言え大変だね、君も」

カエル顔の医者は呑気な口調ながら手早い処置を施して黒田の肩に包帯を巻いた。

「一応、ベッド空いてるけどどうする？」

「いえ、大丈夫です、お気遣いありがとうございます」

「ミサカも問題ありません、とミサカは元気が戻った肩をぐるぐる回しながら言ってみます」

そう第3位の少女が傷口のある肩を乱暴に回すとカエル顔の医者は慌ててそれを止めさせる。

「で、どういう事情が聞かせてもらえますか？超電磁砲さん」

診察室の壁に背をかけていた峰岸が口を開いた。

「パスを確認出来ない以上、貴方たちに教えることは出来ません、とミサカは一度言っただろこのちびっ子という思いを殺して述べます」

「ち、ちび…！？」

「それよりも先ほどの場所に戻りたいのですが、とミサカは哀願してみます」

「戻るって…殺されちゃうわよ？私は峰岸君から聞いた情報通りの

事しか知らないけど、

その情報だけでもはつきりとあなたが負けるとわかるわ」

「別に私が死んでも貴方たちに迷惑が掛かる訳ではありませんが、とミサカは可愛らしく首を傾げて疑問を口に出してみます」

「あのですね、僕たちは仮にもジャッジメントなんです、むざむざ一般人が殺されると分かっている現場に行かせるわけがないでしょう」

峰岸は別段感情を込めずにそう言った。

峰岸のその言葉に若干黒田は苛立ちを覚えた。

峰岸は元々、学園都市の風紀を守りたい、という理由でジャッジメント風紀委員に志願した訳でないことを知っているからだ。

そう、こいつは、美沙の尻を追っかけたい、それだけのために風紀委員になった。

そして、幾人も落ちる試験に合格して実際に風紀委員になった。

要するに過度のストーカーである。

一歩間違えれば犯罪を犯す側の人間なのだ。

「立川美沙」というカードが風紀委員にあるからこちら側にいるだけで、

己の欲のためならこいつは何でもするだろう。

だが、言っていることは正しい。

確かに同じ超能力者（レベル5）とは言え、第1位と第3位の間には差が有り過ぎた。

能力で戦わなかったのも10万ボルトの電撃がそのまま反射されて自分に当たった時の事を想定していた、と考えれば納得がいく。

「美沙、今日はこいつ、お前のマンションに泊めてやれ、常盤台の寮には俺から連絡を入れておく。一人にしたら勝手に現場に戻りそうだしな」

「了解了解、お譲ちゃん、お姉さんと一緒にお風呂入ろうか？」

「...？」

勝手にどんどん話が進んでいる三人の会話に首を傾げながら第3位の少女は美沙に連れられて出て行った。

「さて...と」

そう言って病院から出ると黒田は携帯を取り出す。

電話帳から白井黒子のデータを取り出して、通話ボタンを押した。

『…なんですか？黒田先輩、支部にも来ないで珍しい』

超不機嫌そうに電話に出た黒子。

「悪い、少しトラブルがあつてな、ちょっと今日超電磁砲のお嬢さんを借りるぞ」

『お姉さまですか？お姉さまに何の用がありますの、ちよつと待っていてください、今変わりますから』

…はっ？

黒田は会話に余りにも不自然すぎる点を突きつけられて、一瞬間を喰らった。

今変わる…だと？

そんな、バカな。

確かにあの第3位の少女は美沙に連れられていった、間違いない。

まだあれから5分も経っていない。

美沙がレポートで寮に送り帰した？

いや、それは有り得ない。あいつは自分の言葉に責任を持てる人間だ。

あいつは俺の言葉に了解と言って応えた。

ならば、第3位の少女は今「美沙と一緒に行動しているはず」だ。
電話口から先ほどまで聞いていたそのままの声が聞こえてきた。

『もしもし？黒子の先輩だって？私に何か用？』

それは間違いなく超電磁砲の声だった。

第1位と第3位 - 2 - (後書き)

またも中途半端でごめんなさい^^;
短くてごめんなさい、

何も考えないで書いててごめんなさい、
ちよつと吊つて来ます(何

絶対能力者進化計画（レベル6シフトけいかく）（前書き）

もう既に禁書や超電磁砲の名を借りた駄文に成り下がってきまして
orz

絶対能力者進化計画（レベル6シフトけいかく）

黒田は知らないうちに流れ出る汗を拭いながら電話口の相手に再度尋ねた。

「お前…本当に超電磁砲、か…？」

『はっ？何言ってるのよ、当たり前でしょ、それに私には御坂美琴って名前があるの』

「ああ…じゃあ聞くが御坂、お前、双子とかだったか？」

『…違うけど？』

違う…？

じゃあ、美沙と一緒にいったあいつは一体誰だ？

『話が見えないわねえ、ちゃっちゃと用件言いなさい』

美琴の声に黒田ははっとなって慌てて話を切り出す。

「いや、お前と瓜二つの女の子を保護したんだがな…別人だったのか…？」

『……………ぐいぐい』

「あん？」

『どこで保護したって聞いてんのよっ!』

電話から耳を離しても聞こえてくるんじゃないかという叫び声に
思わず黒田は携帯から顔を離す。

「第7学区の土手だよ、川があるところ、アクセラレータ一方通行知ってるか? あいつに殺されかけてた」

『…そいつは無事なの?』

「ああ、今のところはな、だが何だか死にたがってるようにも見えた、実験がどうとかも言ってたな」

『あんだ、今どこにいのよ?』

「病院の前だが…?」

『今からすぐに行くから、ちょっと待ってなさい!』

美琴がそう言つと電話はぶちつと切れてツー、ツー、ツーという音だけが残った。

「悪い、黒子、ちょっと出かけてくるわ」

美琴はそう言つと寮の部屋を出ようとする。

「なんですの？わたくしも一緒にいたしますわよ」

「…ないで」

「はい？」

「ついてこないでっ！」

美琴はそう叫ぶとドアを勢い良く閉めて走り去った。

黒子は美琴の叫びに顔を引きつらせて石と化していた。

「…超電磁のお嬢さんじゃない？」

峰岸が聞くと黒田はゆっくりと頷いた。

「本人は今、こっちに来るそうだ」

「双子、とかですか？」

峰岸の問いに黒田は両手を上げて肩を竦める。

「残念ながらその線も外れだそうだ、どうなってるんだかな」

30分ほどすると美琴が全力疾走で黒田たちの方へと向かってく
るのが確認できた。

余程急いだんだろう、息が上がっている。

「はぁ…はぁ…で、あんたがジャッジメントの…?」

「ああ、黒田だ」

「それより、保護したってのはどこよ?」

「今ここにいない、安全なところに匿ってる」

「…そう」

黒田の言葉に少しだけ美琴のトーンが落ちる。

「御坂、お前は実験とかいうものの正体を知ってるな?じゃないと
そんなに焦ってここに来る意味がない」

「…これは私の問題よ、口出ししないで」

美琴がそう呟いた瞬間、峰岸の口元が歪む。

「成る程：量産型能力者計画に
レディオノイズけいかく

絶対能力者進化計画（レベル6シフトけいかく）ですが、中々に
興味深い内容ですね」

峰岸の言葉に美琴の顔に動揺が奔った。

「あんだ…読心能力!?」
サイコメトリ

「御坂は能力を使用してないのに読めたのか…?」

「超能力者（レベル5）の放つAIM拡散力場なんて

並の能力者が能力使うときよりも強力ですから、普通に読めましてよ、

尤も、あの少女は読めなかった・・・つまり、あの少女は超電磁砲じゃないことを指してます」

「名前だけで既に厄介そうな実験だな…」

「そうですね、貴方の根底が覆されるかも知れないくらいにね」

「とりあえず美沙を呼び戻すか」

そう言つと黒田は携帯を取り出して美沙へと連絡を取った。

2分も経たないうちに美沙と美琴そっくりの少女は再び病院の前へと姿を現した。

「……………」

美琴は自分と瓜二つの少女を睨みつける。

「で、まずは何から聞こうか…?」

「そうですね、その超電磁砲のお嬢さんのそっくりさんの謎、
レディオノイズはいかく
量産型能力者計画から話しましょうか、

彼女は超電磁砲、つまり御坂美琴さんのDNAマップを使って作られた複製人間クローンです」

「複製人間…？」

美沙の問いに峰岸は頷きながら言葉を続ける。

「超電磁砲を量産する計画があったようですね、DNAマップは幼少期に違う意図で提供したようですが、学園都市の本題は最初から超電磁砲の量産にあったようです」

「そんな簡単に超能力者（レベル5）をポンポン作られたんじゃない普通にカリキュラム受けてる美沙ちゃんたちの立つ瀬がないわけ
え」

「そこですよ、製造されたコピーは超電磁砲に遥か及ばない欠陥品、つまり欠陥電気だったんです。
レイオノイズ
それでこの計画は中止された…はずでした」

「…でした？」

黒田が僅かに目を細めた。

「学園都市は更に恐ろしい計画を進めたんです、絶対能力者進化計画（レベル6シフトはいかく）…
第1位のあの男を絶対能力者（レベル6）にする計画です。方法は超電磁砲を128回殺すこと。
でも超電磁砲クラスの能力者が128人も存在するはずがない、
レイオノイズはいかく
そこで先の量産型能力者計画です」

「まさか…」

黒田の呟きにニヤリと口元を歪めると峰岸は黒田の予想通りの答えを出す。

「そう、量産された欠陥電気…妹達を

レディオノイズ シスターズ

2万回殺すことでその穴を埋める算段のようですね、

ツリダイアグラム

樹形図の設計者の演算結果らしいですからきっと確かなんでしょ
う」

「…いいわよ」

そこまで黙って聞いていた美琴の髪から火花が飛び散った。

「もう喋るなって言ってるのよ、このチビ助があああああああ
！！」

瞬間、3つの落雷が走る。

黒田と峰岸はそれぞれその場を少し離れてそれを回避。

美沙の姿は美琴の髪から火花が奔った瞬間にもうそこに無く美琴
の後ろにテレポートしていた。

避けた…？

手加減したとはいえ、私の一撃を…？

この赤いチビは読心能力だからまだ分かる。
サイコメトリー

この緑の女は多分、黒子と同じタイプの能力…
じゃあ、こいつは…真ん中の男は一体どんな手を使って今の一撃を避けたの？

美琴の思惑とは裏腹に黒田は話を進めていく。

「とりあえず、二万回そのお嬢さんが殺されなければ実験は阻止可能なんだな？」

「まあ、そういうことになりますね、
どうやら超電磁砲のお嬢さんは関係機関を一つずつ潰してるみたいです」

…っ！また人の心を勝手に…

美琴の顔が歪む。

「よし、そういうことなら俺たちもやろう、学園都市の上がついてるならジャッジメントは使えんな」

…？

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！余計なことしないで…！」

焦って黒田を止めようとする美琴の肩を後ろから美沙がそっと抑えた。

「ムリムリ、ああなった敏水はこの美沙ちゃんでも抑えるのが難しいんだから」

「だからって、これは私が産んだ計画なの！責任なら私が取るからあんたたちの出る幕は無いつてんのよ！」

美琴の言葉を見捨てるかのように黒田は言葉を続ける。

「ふむ…御坂は一人でも大丈夫だろうが、俺たちはチームプレイで潰すしかないな、

峰岸、一人テレバス念話能力の使い手を知らないか？

出来ればジャッジメントには所属しないで口が堅いやつがいい」

峰岸はその問いにふむと顎に手をやる。

数秒、考えたあとに。

「ああ…いることはいるんですが…凄く嫌ですね、個人的に」

「贅沢は言ってられん、そいつに頼もう」

「ああ、それって琴音ちゃん？」

美沙の言葉に峰岸は嫌そうな顔で頷いた。

「どんなやつなんだ？」

「今年中学3年生、私たちの中学の後輩よ、進学先ももう決まってるらしいわ、霧ヶ丘女学院だって」

「霧ヶ丘？別にテレバス念話能力なんてそんなに特異な能力じゃないだろう？」

「稀少なのは能力発動時の性格の変貌でしょうね、彼女、二重人格だから、

大方、二重人格は二つ能力が使えるかどうかの実験でもさせられるんじゃない？」

「どちらの人格も問題は無いのか？」

「ああ、それは大丈夫、どっちの人格の時も口は堅いし、約束は守るタイプの子よ、

美沙ちゃんが保障するわ、ただ能力使用時の彼女は若干取っ付き難いのよね」

「よし、まあ、そいつでいいだろ、峰岸、連絡取ってくれ」

黒田の言葉に峰岸はがつくりと肩を落とす。

「僕が連絡取るんですか…嫌なんだよなあ、『読んでも』別人格の時だから本心が知れないし…」

文句を言いながら携帯を取り出して電話帳からデータを取り出して電話をかける。

プルルルル、ガチャツ。

『ありやいや！？これは私よりも背が10cmも低い峰岸先輩じゃあないですか、

珍しいですね！私に何か用ですか？』

「相変わらずの減らず口が聞けて何よりです…僕自身が用があるわけじゃありません、

かといって僕が関わってないわけでもありません、とりあえず今から指定する場所に来てくれますか？」

『了解、了解ですよ、あ、ひょっとして立川先輩も一緒？』

「そうですよ、いいから早く来てください、超有名人にも会えますから」

『イエッサー！有名人とか興味ある！私、栗原琴音くりはらことねは今から突貫します！！』

指定ポイントを告げると峰岸は溜め息をつきながら携帯をしまった。

「30分もあればつくそうです」

「ふむ、じゃあ御坂は今まで通り関わってる機関を順に潰していく、くれ、

俺たちはこの妹達シスターズの一人…

名前無いと不便だな、御坂セカンドとでもしておくか、こいつを保護しながらお前の逆順で機関を潰していく」

「だからっ！何でそう首を突っ込みたがる訳！？これは私の問題なのよっ！！」

「学園都市の人間が困ってるから、は理由にならないのか？」

黒田の問いに美琴の目が点になる。

…はっ？何それ、こいつもあの馬鹿と同じタイプの人間？

それとも…

「それ、ジャッジメントとしてってこと？あんな個人としてってこと？」

「両方だが、あえて言うなら後者の方が大きい」

「…ふん、かawaii女の子守って善人気取り？」

美琴の言葉に少しも動じることなく黒田は言葉が続けた。

「少し…昔話をしようか」

そう呟くと青い空を見上げる。

「俺がまだ中学2年のころだ、

ジャッジメントの仕事で能力者が強盗をやらかしたと聞いてな、近くにいたのが俺だった、

能力者は強能力者（レベル3）が4人ほど相手だったな。2人ほど倒したところで

俺はふとした油断から背中に思い切り炎の直撃を喰らった。あの頃は俺の能力も雑だったからな、

炎の存在に気付けなかった、残った2人が止めを刺そうと俺に近づいてきた。

…その時だ、一般人の少年が急に割って入ってきたのは」

「…一般人の少年？」

「御坂、お前、『相手の能力を無効にする能力』って見たことがあ

るか？」

その言葉に美琴の脳裏に黒髪のツンツンヘアの少年の姿が横切った。

「その一般人は相手の炎に対して右手を掲げると炎が霧のように消えたんだ、

うるたえる能力者たちはその一般人によって倒された」

「……………で？」

美琴は腕を組んで右人差し指だけを小刻みに自分の左肘へとんと突いた。

「うん？」

「……………続きよ」

「ああ、倒された能力者たちを横目にその一般人は俺に手を差し伸べた。

俺は聞いたよ、ジャツジメントでも無い一般人のお前が何で俺を助けたんだってな」

黒田はくくつと笑って

「そしたらそいつ何ていったと思う？」

「それを聞いているのが私でしょ！」

「いや、失礼、思い出しただけでも笑いがない…そいつこんなこと言

「つたんだ、
困ってる人間を助けるのにジャッジメントだの、
一般人だの無能力者（レベル0）だのなんて肩書きがいるのかよ、
とな」

美琴は確信する。

黒田が言っている一般人が黒髪ツンツンヘアの、
自分が一度として勝てていないあの馬鹿だということを。

「同時に気付いたのさ、ジャッジメントなんて肩書きは別に必要な
いうてことが、

俺はこの街やこの街に住む多くの連中が好きだ、
そいつらが困ってるときに助けて何が悪い？」

「いまや、それが敏水の行動理念なのよねえ」

くすくすと美沙が笑みを零す。

「だから、俺はお前に加担する、例えそれが『偽善』でも『押し付
け』でも構わん。

確かにその通りだからな、俺の自己満足さ、
それで仮に誰かが助かるならどういふ評価を得ようが俺は自分の
行動に誇りを持って行動している」

少しの沈黙。

そして美琴の口が少しだけ動いた。

「……………その街に住む連中ってのに私やそいつも入ってるわけ？」

そいつ、とは御坂セカンドのことだ。

私という単語を混ぜたのは自分の意思ではないにしろ
この実験の加担者であることを責めていると言ったところだろう
か。

「当たり前だ」

黒田は即答した。

「お前だけじゃない、可能ならば一方通行だアクセラレータって何とかしてやりた
い…が、
流石にあいつは俺の手に余る、なら俺には俺の出来ることをする
だけさ、約束する、

何があってもその御坂セカンドは守りぬく、とな」

そこまで言うとき黒田は右手を美琴に差し出した。

「お前は今まで通り一人でやればいいさ、
ただ俺たちも動かせてもらう…それで同意してもらえるかな？」

モジモジと美琴は罰が悪そうにうな垂れると
やがてスカートでごしごしと手を拭いて黒田の手を握り返した。

「……………わかった、私の負け、その代わり…
そんだけ言っただから死んでもそいつのこと、守りなさいよ」

「わかってる」

そう言うと二人は握手した手を離す。

「あ、そうだ、この事、黒子には絶対に話したら駄目だからね」

「それもわかってる、こんなことを白井に話したら収集がつかなくなりそうだしな」

その言葉を聞いて美琴の表情にやっと笑みが零れた。

「ははっ、何かリアルに想像できて怖いわ、それ」

美琴がそう言った所で黒い髪をツイストに纏めた少女が手を振りながら黒田たちの方へやって来た。

絶対能力者進化計画（レベル6シフトけいかく）（後書き）

もはや禁書目録の設定を借りたオリジナル作品になっていったる気がします、

二次創作としてどうなの？これはww

チーム結成（前書き）

いよいよ二次創作では無くなつて来た

チーム結成

真つ黒の長い髪をツイストに纏めた少女は
くりくりとした目で黒田たちを一通り眺めたあとに眼鏡を上げて
敬礼のポーズを取る。

「栗原琴音、参上です!」

びしつと敬礼してそう言つと琴音はえへへ、と笑みを零した。

「で、で、超有名人つてどこですか?」

「一目見ればわかるでしょう、あ、いや、逆にわかりずらいんです
かね、この場合」

峰岸の言葉に首を傾げつつ、ふと美琴と琴音の視線がぶつかった。

琴音の目のキラキラ具合が一層輝きを増す。

「え!ええ!!この子、

学園都市で7人しかいない、あの超能力者(レベル5)の常盤台
の超電磁砲!」

うわーっ!と言いながら美琴に握手を求める琴音。

「ああ、まあ…ね、よろしく」

美琴は琴音のハイテンションに若干引き気味にも無難に挨拶をす
ませた。

「へえ…って御坂さんがもう一人いる!？」

次に御坂セカンドと目があって驚愕する琴音。

「ええ、この事に関して貴方と呼んだんですが…

今から言う事は絶対に他の人には話さない、と約束できますか？」

峰岸の言葉の中に本気の部分を感じたのか琴音は真顔になって小さく頷いた。

「宜しい、では黒田さん、説明お願いします」

「ああ」

黒田は頷くと順を追って琴音に説明しはじめた。

琴音は驚きを隠せないようではあったが事情の飲み込みは早いのか最後の方は何度も頷きながら聞いていた。

「じゃあ、私たちはこの御坂セカンドさんを
護衛しつつ敵の拠点を御坂さんと逆順に潰していけばいいんです
ね？」

「そういうことだ」

「私はその時の伝達係ですか？」

「飲み込みが早くて助かる、」

早速だがお前の能力の力量を調べたい、俺たちに何か送ってこないか？」

「はい、いいですよ」

そう言つと、琴音は眼鏡を徐に外した。

「…？何で眼鏡を外すんだ？」

”私が眼鏡が余り好きではないからだ”

黒田の問いに頭に直接、琴音の声が響いた。

今までの琴音とは明らかに違う、余り感情の乗っていない、無機質な声。

”初めまして、と言つべきか…？”

もう一人の栗原琴音、くりはらあまね栗原天音だ、以後よろしく頼む”

「そうか、二重人格と言つていたな…互いに互いを認識しあつてるのか？」

”ああ、医者に言わせれば互いを完全に認識しあつてる二重人格は珍しいらしいぞ、

まあだから霧ヶ丘の連中も私を拾おうとしたんだろうがな”

「ふうん、天音ちゃんとは久しぶりに会つたけど、
テレパスこの念話能力って天音ちゃん的能力なの？
それとも琴音ちゃん的能力なの？」

” そんなことは知らない、専門外だしな、

人格は2つあっても脳は一つしかないんだから
この能力しか使えないと思うのだがな、私は”

「妹達シスターズが全員一緒に能力なのと理屈は同じってか？」

” そんなところだ”

そうテレパシーを送ったところで琴音は眼鏡をかけた。

「で、どうでしたか？能力的に問題ありました、私？」

眼鏡をかけた瞬間に入れ替わったのだろうか、口調が元の琴音に戻っていた。

「…問題ない、栗原…という言い方は2人いるから好ましくないか、
琴音より天音の方が簡潔に伝えてくれて助かりそうだ」

「あー、あー、そういう言い方は酷いと思います」

ぷくーっと頬を膨らませて拗ねたように琴音は言った。

「では、明日からの行動開始という事で宜しいですか？」

峰岸が確認を取る。

「ああ、構わん、…そうだ、ジャッジメントに休職届けを出すのを
忘れるなよ、

理由は別に何でも構わん」

「了解しました」

「敵を欺くにはまず味方から、かしら？」

何にしても隠し事して休職って気が引けるわね、美沙ちゃん的に」

「それは俺だって同じだ、事情が事情だからな、仕方あるまい」

「ま、じゃあ、あんたたちはあんたたちで頑張んなさい、私はもう帰るわ」

「ああ」

美琴は手のひらをひらひらと振ると帰っていった。

「で、当初の予定通り、作戦行動時以外の時間は

御坂セカンドは美沙に預けるぞ、御坂セカンドもそれでいいな？」

「別に問題はありません、とミサカは意思を伝えますが、

一つだけ疑問を口にしたいとミサカは本心を包み隠さず言います」

「何だ？」

「何故、貴方たちは私を生かそうとするのですか？とミサカは一番の疑問点を口にします」

「聞いていなかったのですか？」

黒田さんの話、黒田さんは貴方に生きていてもらいたい、理由なんてただそれだけですよ、

特に深い思慮や思惑があるわけじゃない、ただ真っ直ぐなんです
よ」

御坂セカンドはちよっぴり首を傾げると、

「その答えはよく理解出来ません、とミサカは学習装置テストメントの不具合でもあるのかと若干自分の教育に不安を感じます」

「別に理解してもらおうなんて思っていない、

ただ、自分からこの実験に参加して死のうとするのだけは止める」

「よく分かりませんがそうします」

「ねえ、ちよっと待って」

美沙が割って入る。

「何だ？」

「妹達シスターズって脳内でネットワーク構築されて繋がってるのよね？」

「じゃあ、このお譲ちゃんの居場所もすぐ突き止められちゃうんじゃない？」

「接続を切れればいいだけです。で、問題ありません、とミサカはその疑問に対する明示的な答えを示唆します」

「じゃあ、問題ないですね、で、明日は何時ごろどこに集まります？」

琴音の問いに黒田が腕を組むと

「そうだな、午前10時ごろにファミレスでいいだろ、

ああ、美沙、御坂セカンドに若干変装させるよ
常盤台の制服も着させるなよ」

「了解了解、私の私服にウィッグでも適当につければ別人でしょ」

「では、今日のところは解散ということで、
栗原以外は休職届けも出さなければなりませんし」

「ああ」

そう言つと黒田たちはそれぞれ別れた。

1時間後、第177支部。

「休職届け…？黒田君が…？」

固法が口元に手を当てて驚きの声をあげる。

「ああ、ちよつと結構酷い怪我を負つてね、完治するまで休ませて
くれて話だったよ」

「黒田君が怪我くらいでジャッジメントの仕事休むなんて珍しいわ
ね…」

何かに首突つ込んでなければいいんだけど」

固法は溜め息をつきながら額に手を当てて呟いた。

翌日。

第7学区、とあるファミレス。

自動ドアが開くと、近くの席に座っていた琴音が勢いよく黒田を呼ぶ。

「早いな、琴音」

「えー、そりゃもう、こんなワクワクするの久々ですから、あ、店員さん、ツチノコパフェ1つ追加でお願いしまーす」

「畏まりました、お客様は？」

「俺はアイスコーヒーだ」

「はい、少々お待ちください」

店員は注文を取ると奥へと下がっていく。

「…来たか」

「ほへっ？」

黒田の呟きと琴音の疑問とほぼ同時に

黒田の横に美沙と御坂セカンドがテレポートしてきた。

「やほっ、お待たせ」

御坂セカンドは腰まで伸びた金髪のウィッグをつけて、服も美沙の私服を着用していた。

「あのー、その子、本当に御坂セカンドさんですかあ？なんか全くの別人…」

「まま、美沙ちゃんの手にかかればこのくらいの変身は容易いことなのよ」

「まるで肉体変化です…」
メタモルフォーゼ

琴音が心底感心したかのように溜め息をつく。

「…胸がゆるいのが何気に純真な乙女心に傷を残します、とミサカは嘆息します」

ほう、と自分の胸に手を当てて御坂セカンドは溜め息を漏らす。

「あとは峰岸君だけね、あ、店員さん、注文お願いしまーす」

「はい、何にしますか？」

「んー、何にしようか、ミセちゃん何にする？」

「何だ、その呼び名は…」

「だって御坂セカンドとかあからさまにおかしいでしょ、だから略してミセちゃん、若干私と名前被り気味だけどね」

美沙は苦笑しながら御坂セカンドの頭を撫でる。

「このロイヤルブレンドミルクティーというものが飲みたいとミサ力は希望を伝えます」

「んー、じゃあ美沙ちゃんはココヤシグラタンでお願い、朝食べてなかったからお腹空いちゃった」

「ロイヤルブレンドミルクティーにココヤシグラタンですね、少々お待ちください…あ、お客様、くれぐれもレポートで食い逃げだけはしないでくださいね」

「何よ、失礼な店員さんね、美沙ちゃん犯罪にはギリギリで手を染めないっていうかむしろそれを取り締まる立場なんですけど？」

美沙の言葉に店員は慌てたように両手を振り、

「あ、ジャ、ジャッジメントの方でしたか！た、大変失礼しましたー！！」

と言ってそそくさと奥へ消えていった。

4人分の注文が席に届いて和んでいると店に峰岸が入ってきた。

「ふあゝあ…」

入ってくるなり大きく伸びと欠伸をすると目を擦り美沙の姿を探す。

がつつくようにココヤシグラタンを頬張っている
美沙の姿を確認するとゆっくりと峰岸は近づいてきた。

「遅いぞ、峰岸」

「夜中遅くまで実験する機関を調べさせられたら寝坊の一つくらい
します」

悪びれた様子も無く無理矢理美沙の隣へと峰岸は座った。

「あん、もう峰岸君、席つめないでよ」

「ああ、これはすいません、御坂セカンドさん、向こうの席へ移動
してくれますか？」

「貴方が向こうに行けばいいと思いますが、
とミサカは後から来たくせに図々しいにも程があるだろこの赤
ピという感想を漏らします」

「貴方のために僕は動いてるんだから貴方がこのくらい譲歩するのは構わないでしょう」

「まーまー、いいじゃないですか3人で仲良く座ってれば、峰岸先輩も大人気ないですよ、背の大きさに現れるんですかねえ？」

「背の高さと心の広さは無関係でしょう、まあ、いいです、本題に入りましょうか」

「そうだな」

黒田はアイスコーヒーの氷をぼりつと噛むと頷いた。

峰岸が携帯を取り出して地図を表示する。

地図には10箇所ほどリストアップされたポイントが出ていた。

「計算すると御坂さんのように数日に

1件のペースで潰していたんでは実験の方が早く終了してしまします、

実験よりも早くに機関全てを潰すには少なくとも一日10件は潰さないといけません」

「でもさあ、潰しても他にたらい回しになって結局潰す機関も増えるんじゃないの？」

「そこは根競べですね、こちらが根を上げるのが先か、あちらが実験中止に追い込まれるのが先かの」

「で、役割分担ですけど…」

「ああ、まずは俺が機関内の構造を探る、
美沙はそこからピンポイントで重要場所へレポート、データを破壊する。」

峰岸は能力者がいた場合のサポート、
琴音は全員に今の状況を知らせるバックヤード担当だ」

「私は何をすればいいのでしょうか、とミサカは答えます」

「ミセは何もしなくていい、まあ、電磁ロックの開錠とかに
少し働いてもらうかもしれないが、お前は守られる側ということ
を認識しておけ」

黒田のミセという単語に対して、「何ですか、今の呼び名は」、
と峰岸が美沙に聞いたが

美沙は「いいでしょ、私が考えたのよ、いい名前でしょ」、「と言
うと

「ええ、とても」と取って返したかのように頷いた。

「よし、じゃあ行動開始とするか」

そう言っただけで席を立つとする黒田。

「え？まだ私、パフェ全部食べてないですよ」

「早く食べてしまってください、時間が惜しいんですから」

峰岸と黒田に急かされて琴音は慌ててツチノコパフェを掻っ込んだ。
だ。

途中、アイスクリームが頭に響いたのかとんと何度もコメカミに手のひらを当てていた。

チーム結成（後書き）

さ、いよいよオリジナルキャラしか出てこなくなりましたw
もうどうしたものか^^;

それにしても学園都市のメニューを考えるとときに

奇抜なものって思ったんですが

どんな味なんでしょうね、ツチノコパフェとココヤシグラタンw

w

敵対勢力（前書き）

もつ何も言う事がない、これはオリジナル作品だ！ W W

敵対勢力

黒田たちの機関潰しは順調だった。

1日10件のペースを上回り2日で25件の戦果を挙げていた。

そして26件目。

その機関の裏口で黒田の足が止まった。

「…どうしたんですか？」

峰岸の言葉に僅かな沈黙で答える。

「割とでかい部屋に学生がいるな…女が1人」

「学生ってことは…能力者じゃない!？」

「だ、な…こういう機関に能力者がいるのは珍しいと思うが…実験関係者、か…？」

「具体的な距離は？」

「機関に入って、2階、50mほど行ったところにある大きな部屋だ、読めるか？」

黒田の問いに峰岸は若干眉を吊り上げた。

「いえ、まだ読めませんね、能力を使用していないのだと思います」

峰岸の答えに黒田は頷くと、

「よし、美沙、奇襲で行くぞ、峰岸は何時でも読む準備を琴音は伝達忘れるな」

琴音はゆつくりと眼鏡を外すと感情を一切乗せずに言葉を発する。

「了解した」

「では…ミッションスター！」

黒田の言葉と共に美沙の姿が虚空へと消える。

機関・2F・実験データ収容室。

茶髪でロングヘアーの少女は静かに部屋の中央に立っていた。

美沙が少女の後ろへとテレポートする、と同時に鋭い蹴りを少女に放った。

蹴りが切り裂く空気之音に少女は気付くと振り返り、美沙の蹴りを間一髪のところまでガードする。

止められた…！？

少女は僅かにバックステップするとニヤリと笑った。

「あらー、侵入者退治なんて楽な仕事だと思ってたら、ピンポイントで私の所にテレポート、
中々楽しませてくれそうだなわさ」

「お生憎、楽しませる気はこっち側にはサラサラ無い訳よ」

美沙はそう言つと再びテレポートする。

「どこに移動しよう！」

少女がそう言った瞬間、収容室の地面が盛り上がった。

「能力使用確認、サイコメトリー読心能力開始します」

「こちらでも確認した、安全ポイントは現在の美沙の位置から左後方3メートル地点、琴音！」

”了解、即座に伝える”

美沙は琴音（天音）からの念話能力^{テレパス}によって安全位置を確認。

そこへとテレポートする。

床のタイルが猛スピードで天井へと次々当たり、木っ端微塵に碎け散った。

避けた…？まるで私の攻撃位置がわかりきったようだわさ…

「あんた、まさか多重能力^{デュアルスキル}…なわけないだわさ、他に仲間がいるだわさ？」

「そんなことに一々答えるほど、私、無防備に見えちゃうかしら？」

「だったら力ずくでも、答えてもらうわさ！！」

少女が左手を美沙の方へと突き出した。

「能力は念動力者^{テレキネシス}、
名前^{にいやまはるな}は新山春菜、組織『アイディア』に所属」

峰岸の口から次々に少女の情報が流れ出る。

「アイディア…？聞いたことないな」

「前方、美沙さんに向かって直接能力を発動するつもりです…！！」

”伝える”

美沙は咄嗟に両腕で前を庇う。

と、同時に衝撃が襲い、美沙の体を吹き飛ばした。

吹っ飛ぶ途中でそのままテレポートして、別の場所に着地する。

「…さて、こちらでも聞きたいことは山ほどあるわけ、そこんところ
いいかしら？春菜ちゃん？」

「…！？」

春菜と呼ばれた少女に僅かに動揺の色が走った。

しかし、すぐに落ち着きを取り戻す。

「成る程、お仲間は読心能力サイコメトリーなわけなわけ、だけじゃないわけ、
側にいないところを見ると念話能力テレパスもいると予想できるわけさ」

「頭の回転が早い子はお姉さん、嫌いじゃないわよ、
で、質問には答える？思うだけでも別にいいわよ」

「目的はあんたらを潰すこと、実験は知らない、仕事が回ってきた

からやってるだけだわさ！」

春菜が叫ぶと同時に今度は天井が大きな音を立てて崩れ始めた。

「…あの部屋一帯を完全崩壊させる算段ですね」

「落ちる無機物の範囲からして逃げ場はその新山とか女の頭上しかないな」

黒田と峰岸は特に慌てた様子も無く、会話した。

その情報を的確に素早く、ポイントだけ琴音（天音）は美沙に伝える。

美沙はその情報を元に春菜の頭上へとテレポートした。

その時、黒田たちの後方から細長い氷柱が機関の窓を割っていった。

氷柱は的確に、春菜の頭上…美沙の下へと飛んでいく。

逃げ場の無い美沙は咄嗟に左手を前に出して、氷柱を受け止める。

ブシュッ…という音と共に氷柱が美沙の左手のひらに食い込む。

「…っ!？」

痛みに歪む表情を見て春菜は楽しそうに笑った。

「アハハハハハ！仲間がいるのがあんなにだけだと思ったら大間違
いなんだわさ」

「…上等っ！」

美沙は食い込んだ氷柱をテレポートさせて抜き取るとそのまま踵
を春菜に向かって落とした。

テレキネシスの生んだ磁場で踵を受け止めると反撃をしようと心
見るがそこに既に美沙の姿は無く

春菜の足元に移動済み、そのまま足払いをかける。

「…くっ！」

その場に転倒する春菜に向かって、
地面に転がっている氷柱を春菜のスカートへと直接テレポートし
て突き刺した。

「さあ、逃げられないわよ、お話ししようか？」

春菜ちゃん、貴方たちの親玉は？アイディアの構成員と能力、全

部話してもらっわよ」

「残念だけど答えられないわさ、親玉の顔なんて学園都市の上層部
ってことしか知らないし、
仲間の能力を口に出したり思ったりするほど迂闊なわけでもない
わさ」

「強情な子は嫌いじゃないわよ」

「それは嬉しい告白だわさ」

氷柱が勝手に抜けて反転し、美沙の方へと牙を？いた。

当たる瞬間に氷柱はテレポートして遙か後方にある壁に激突する。

「今日のところはこちらの負けだわさ、

複数犯だとは思わなかったし、次会えるのを楽しみにしてるわさ」

次々と壁が美沙に迫り、美沙に当たる直前で止まった。

瞬間、春菜の足元の床が振動して、そのまま勢いで春菜が跳ぶ。

真上の天井の一部が勝手に崩れ落ちて空が見えるとそのまま春菜
の姿は空へと消えた。

「逃げられた、か…」

「ええ、そのようです、実験加担者では無いようですが…

学園都市の上直属の組織…いよいよ一筋縄じゃ行かなくなってきましたね」

「どうすればいい？」

「ああ、帰還するように伝えてくれ、これだけ派手に壊れたらデータも残ってないだろう」

「了解した」

琴音（天音）の言葉とほぼ同時に美沙が黒田たちの側にテレポトした。

「つつ、順調だと思ってたけど中々上手くことは運ばないわね」

「そんなものだ、それより手、大丈夫なのか？」

黒田の言葉に美沙は左手をパタパタさせて、

「これ？これくらい平気、ジャツジメント用の応急器具もあるしね、それより美沙ちゃん、お腹すいたんですけど」

美沙の言葉にミセがそつとどこからか包帯を取り出して美沙の左手に巻いた。

「あら、あららら？これは、年下の妹萌え展開？」

「何を言ってるのかよくわかりません、とミサカは伝えます、ミサカはただ傷口から細菌の類が入るといけないと思ったのでこ

うしたのだと言います」

ミセの言葉に美沙は軽く笑うと

「冗談、わかってるって」

と言った。

とあるビルの屋上。

「あぎゃん！」

春菜は思いつきりげんこつを頭に喰らった。

喰らわせたのは春菜より2〜3歳年上に見える黒髪のショートカ
ットの女。

「まったく、目標一つロクに潰せないの、あんた、ギャラの分け前考
えようか」

「でもだわさ、テレポーター空間移動にサイコメトリー読心能力に
テレパス念話能力のトリオなんて結構厳しいものがあるわさ」

「言い訳は聞かないし聞く気もない、それに3人だけじゃないわ」

「へっ？」

「但野^{たんの}の確認してもらったけど裏口の方にいたのは4人、つまりその女含めて5人のグループってことね」

「分かってたなら辭氏^{ことばし}も手伝ってくればよかったわさ」

「一発、手伝ってやったでしょ、それに読心能力の有効範囲人数があんた一人とわかりきってるなら一緒に行動してやってもいいけど、

私は心覗かれるなんて趣味じゃないし…

まあ、あんたのギャラの分け前を半分私に回すのなら考えなくも無いけどね」

「うー、いつも辭氏はすぐにギャラギャラ言う、守銭奴」

「何とでも言いなさいな、お金を貰って動く、如何にもプロらしくっていいじゃない」

辭氏はそう言うつと背中を向けてビルを降りた。

付き添うようにいた三編みの少女も無言でそれについていく。

「あ、待つわさ、辭氏も但野も！…てあれ？早沢は？」

「別件で出張ってる、早くしな、置いてくよ」

「待つて、あ、ファミレスで何か飲みたいな」

「自分で払えよ」

「もう、辭氏のケチケチケチ、金余ってるんだからたまには奢ってくれてもいいわさ」

「人に奢る金なんて一円たりとも存在するわけでもなし」

辭氏はそう言ってくくと笑うと階段を降りていった。

敵対勢力（後書き）

まあ、普通に組織潰していく話でも良かったんですけど
それじゃ面白くないし単調だし、ここは一発敵さんにご登場願いました。

アイディアの面々と能力については後々触れますが春菜だけでも

にいやまはるな
新山春菜、14歳。

組織『アイディア』に所属する茶髪で腰まである髪の毛が自慢の少女。

テレキネシス
能力は念動力者。

語尾に「〜だわさ、わさ」と付けるのが特徴。

交錯

美沙の左手の応急処置を済ませて、美沙自身の要望もあり黒田たちはファミレスの方へと向かっていた。

「んゝ…運動した後はお腹がすくわ、琴音ちゃん、何食べる？」

その美沙の言葉に琴音の眼鏡が妖しく光る。

「ふっふっふ、よくぞ聞いてくれました、後1個で全パフェ制覇なんです。」

最後の1個の名はハバネロトウガラシパフェゝ地獄の血の池地獄です！」

「おまつ…それ本気で食べる気が…？」

黒田の言葉に琴音はきょとした顔をして

「そうですけど、何か変ですか？」

「それはもう名前にパフェがついているだけでパフェではない気がするぞ…」

「例えどんな名前だろうとパフェはパフェです、きっと甘美な味に違いないです！」

ぐつと拳を握り締め力説する琴音。

ミセが持っていたメモ帳にサラサラと何かを書く。

びつと一枚、メモを破り、琴音に見せる。

「想像するにこんな感じだとミサカはイメージ図を描いてみました」

そこにはありとあらゆる香辛料（主にハバネロとトウガラシ）が
てんこ盛りになった、

一口食べればもう夜にはトイレには行けないであろう物体が描か
れていた。

その絵を見て、若干引く琴音。

「で、でもでも、パフェ制覇は乙女の夢ですから！こんなことくら
いで諦めてはいけないのです！」

「何を意地になってるのですか、貴女は……」

峰岸が溜め息まじりにそう呟いた。

角を曲がり、あと少しでファミレスという所で黒田の足が止まる。

「どしたの？」

「……さっきの女だ」

黒田の視線の先には春菜の姿があった。

3人組みで連れ添ってファミレスに入っていくのが見えた。

「世の中狭いのね、何も同じファミレスに入らなくなっちゃって」

「それより…一緒にいた2人のうち1人の制服、見たか？」

黒田の質問に峰岸が間髪入れずに答えた。

「ええ、あれ、長点上機の制服ですよ…何であの学校の生徒がこんな所を…」

長点上機学園、学園都市の『5本指』のTOPで去年の大覇星祭も制した超エリート学校だ。

能力開発における実績は学園都市でも常盤台に並び1、2に入るといっても過言ではない。

しかし長点上機は学区が違う。

いくら夏休み、とは言えこんな所をうろついている、というのがそもそもおかしいのだ。

「考えられるとすればあいつ等もあの女の仲間…アイディアとか言う組織の構成員って所か」

「ねえねえ、そんなこといいからさ、中入ろうよ、美沙ちゃん、マジで腹ペコなんですけど」

「いや、今俺たちがあそこに入るのは得策じゃないな、特に美沙は顔を見られてるしな」

「えー、じゃあ、場所変えるの？」

「ああ、22学区の地下街の方にしよう」

その黒田の言葉に琴音は全パフェ踏破計画の夢がガラガラと崩れ去り、

「そんな殺生な…」などと言いながら本気で涙ぐんでいる。

そんな琴音の肩に美沙は手を置くと、

「まあまあ次あるわよ、次は美沙ちゃんが奢ってあげますわよ？」と微笑んだ。

ファミレス内部。

「……………」

三編みの少女、但野雅は僅かに口を動かす。たんのみやび

「そう、入ってこなかったか、まあ普通に考えてそうよね」

ことばしあかね 辭氏茜は頭をポリポリと掻きながらクリームソーダを注文した。

「あれじゃないだわさ？但野の制服でも見てびびったんじゃないわさ」

ぷぷつと笑いを堪えるように春菜が呟いた。

「それもあるかもね、ってかさ但野、何であんた制服なわけ？」

「……………」

雅はほとんど聞き取れないような小声でぼそつと喋る。

内容は「校則だから」の一言だった。

「校則って、そもそも組織に属してる時点で立派な校則違反じゃない」

そう言つと茜は運ばれて来たクリームソーダに待ってました、とパンツと両手を合わせた。

「辭氏、一口、一口だわさ！」

「だーめ、自分で頼みな」

雅はくると自分の目の前にある紅茶の中にスプーンを入れて何時までも掻き回している。

と、その時、店内に1人の女が入ってくる。

ウェーブがかった肩ほどまで伸びた髪の毛にやや垂れ目のその女は辭氏たちを見つけると春菜の隣へと座る。

「お疲れ、早沢、仕事は順調？」

「…学園都市は今日も猛暑、とても暑かった」

「それは結構」

垂れ目の少女、早沢舞理はやさわまいりの言葉と

辭氏の言葉が噛み合っていないような気がするの
は周りにいる人だけで本人たちはこれで十分に通じ合っていた。

順調じゃなければ、もっと違う答えが返ってくるからだ。

「ま、早沢の仕事も片付いたところで、状況を整理しておきましょうか」

クリームソーダのアイスをパクリと食べながら茜が言う。

春菜はその一挙手一投足を涎を垂らしながら眺めていた。

「『敵』は少なくとも5人以上、内3人は
テレポーターテレポーターサイコメトリーサイコメトリーテレパステレパス
空間移動に読心能力に念話能力、
残る2人の能力は不明」

「……………」

雅のごによごによとした語りに辭氏は賛同するかのようにつく。

「私もそう思うわ、恐らくTOPはこの3人じゃなく残った2人の
内のどちらか、

…多分、男の方ね」

「なんでわかるわさ？」

「女の勘」

「…樹形図の設計者も真つ青な素敵な回答ありがとうだわさ」

「ん」

アイスを食べ終えた辭氏がズズズッとストローでメロンソーダを吸う。

「で、今後はどうするわさ？」

「別にどうもしない」

「へ？」

「そのうち、あいつらが次に狙う機関が上から報告されてくるでしょ、その時まで何もしない」

「でも情報収集とかしないわさ？」

「それって金になるわけ？私、ただ働きはしないって心に決めてるの」

「……………」

雅が言葉になっていない言葉を口にする。

「まあ、確かに但野の言うとおり、早沢の能力があれば事前聴取なんていらないだわさ、

うっ、もう我慢できないわさ、ちょっと店員！クリームソーダッ！」

春菜はバンバンツとテーブルを叩いて店員を呼びつける。

「店内では静かにしろ」

「くっ…変な所で常識ある人間は嫌われるだわさ」

そう言いつつ春菜の目は運ばれてくるクリームソーダに釘付けだった。

地下街・和食レストラン。

「今後、あいつらが現れる可能性っていうのはあるんですかね？」

「あるな、間違いなく、というか120%」

「それについては、はぐっ、美沙ちゃんも、むぐっ、同意権…ごくごく」

「口に物を入れながら話すな」

「はー、食べた、食べた」

トンカツ定食をペロリと平らげると美沙は満足そうにお腹を叩いた。

「ああ、パフェも捨てがたかったけどこの餡蜜もまた、和らしくていいスイーツです」

白玉ダンゴを口の中に入れながら琴音が恍惚の表情で呟く。

「ん？ミセちゃん、食べないの、お蕎麦」

「少し伸びた方が好きなので、とミサカは手をつけない理由の補足説明をします」

「そんな会話はどうでもいい、まったく女つてのは食べ物話になると夢中になるな」

「失礼、先ほどの会話の流れに戻しても？」

「ああ」

峰岸の言葉に黒田は頷いた。

「恐らく、実験関係者ではないということ考えると要するに分類は『雇われ傭兵』的な立場にあると思われます」

「だな、それもアイディア、なんていうおかしな名前の組織だ」

「何でアイディアなのかしらね？もったいい名前あるでしょうに」

「そんなの知るか」

「雇われてるってことは、雇ってる側の人間がいるってことですよねえ？」

「そうですね、恐らくはそれが今回の実験の首謀者、だと思います」

「じゃあさ、そいつ潰せばいいんじゃない？」

「顔も名前も年齢も性別も不明なやつを探せてか？情報が少なすぎるぞ」

「実験関係者ならその内どこかの機関で顔を合わせることもあるかもしれません、

少々強引ですが今度からはデータ破壊だけでなく、

機関に出入りする人間を少し尋問した方がいいかもしれません」

「峰岸先輩の読心能力が一般人に使えれば話早いのに」
サイコメトリ

「それが出来れば僕は立派に超能力者（レベル5）です、常盤台にいるそうですけどね、

尤も彼女は読心どころか精神破壊や汚染、洗脳まで全てこなすらしいですが」

「超能力者（レベル5）ね、まあでも私を撃ってきたあの氷柱の使い手も相当なレベルよね？」

「ああ、俺の探知に引っかからない距離から高速で撃ってきたからな」

「その距離から正確に美沙さんを狙えるということとは…」

「いるな、俺に似た能力のやつが1人、あの2人の内のどちらが氷でどちらが探知なのかまでは知らないが」

「敏水のタイプの能力か、感じるタイプかな、それとも視るタイプかな？」

「恐らくは後者だな、感知タイプなら俺たちを狙っててもおかしくないし…」

場所を認識するタイプではなくて千里眼のように遠くの物を見るタイプかも知れん」

「それならまだ助かりますね、視るタイプなら黒田さんのように、

『相手の情報が分かる』ような余計な付属品まで付いてると思えませんから」

「とにかく、行動あるのみ、よね、とりあえず次の目標を決めときましょうか」

「そうですね、今は22学区ですから…一番近いのは、あった、ここですね、鯨棋院機関」

「よし、行くか」

そう言って席を立つ黒田たち。

店内を出る黒田たちを確かめたスーツ姿の男は素早く携帯を取り出してメールを送る。

第7学区・ファミレス。

茜の携帯に着信メールが入る。

中身を確認めると茜は立ち上がった。

「行くよ、仕事だ、やつらの次の目的地がわかった」

「……………」

「そうね、相手もチームプレイで来ていることだし、組織戦ってやつのお手本を見せてやろうかしら？」

「…空は今日もとても蒼い」

舞理は垂れた目で融けたブルーハワイのカキ氷を見ながらぼそつと呟いた。

「え？もう仕事だわさ？今日2件連続なんて聞いてないわさ！？」

「文句のあるやつはギャラを下げるぞ」

「辭氏は何か言つとすぐそれだわさー！」

春菜の叫びを無視して3人はとっとと会計を済ませてファミレスを出た。

慌てて春菜もその後を追った。

交錯（後書き）

どちらかと言うとアイディアの面々メインの話

パーソナルリアリティ（前書き）

超電磁砲の5巻買ったら関係機関の数って20弱なんだって…
なんたる大誤算ww

まあ、二次創作だしそこら辺は大目に見てください（＾o＾）／

パーソナルリアリティ

第22学区・鯨棋院機関

近くまで来た黒田の足が止まる。

「…いるぞ、あいつらだ、1人増えて4人になってやがる」

「作戦は？」

「普段通り、ただ突っ込むのは全員で、だ」

「了解です」

「峰岸、読む相手を間違えるなよ、俺たちを『視る』タイプの相手を探してそいつを読め」

「わかっています」

「行くぞ、強行突破、関係者からは事情も聞き出す」

琴音はそつと眼鏡を外す。

”了解した”

鯨棋院機関・大広間

「……………」

雅がぼそりと呟いた。

「なる、今回は空間移動テレポータの単独じゃなく全員で来るか、
私たちが全員で待機してるのがバレてるっばいわね」

「と、なると敵の能力のもう1つは但野と似たタイプだわさ？」

「さて、但野と同じ『視る』だけで済むならいいけど、何かひつか
かるのよね」

「…この灰色の空間は間も無く全てを赤色に染める」

「そうね、早沢はあいつらが来次第、
スキルアナライズ
能力解析をお願い、もちろん割れてない2人よ」

「……………」

雅がぼつりと声を上げた。

瞬間、アイディアの4人の真上に美沙と黒田、琴音（天音）がテ
レポートする。

「テレポート女は私にやらせてもらうだわさ！」

春菜がそう叫んで手を上空に揮った。

黒田が予め持っていた、フォークを数本、ばら撒く。

フォークが衝撃にぶつかり吹き飛ぶ。

吹き飛び掛けたフォークがテレポートして春菜の顔面直前に現れた。

「…っ!？」

春菜が一瞬硬直するもののフォークはすぐに凍り付いて、地面へと落下した。

「早沢あ！」

「黒い異性は空に浮かぶ月のように物体位置を把握する能力」

「おーけー、リーダー格を潰すよ！」

黒田はこっそりと琴音（天音）に耳打ちをした。

琴音（天音）は素早くそれを全員に伝える。

黒髪ショートカットの女が氷使いだという情報を簡潔かつ迅速に伝えた。

「……………!」

雅がぎょっとして呟いた。

「はっ？ マシン……ガンだわさ？」

$\dots T_{\tau} \dots T_{\tau} \cup T_{\tau} T_{\tau} T_{\tau} T_{\tau} T_{\tau}$

春菜の言葉と同時に扉が蜂の巣になったかと思しき音を構えたミセが立っていて、

そのまま峰岸が突っ込む。

”
亮輔はあの三編みを読め
”

琴音（天音）の念話を聞くと同時に峰岸は能力を発動。

ターゲットはもちろん、雅だ。

マシンガン装備とは、やってくれるわ……けど逆手に取るとそれは……

「あの金髪女は大した能力持っていない！マシンガンの弾は私が引き受けるわ、

新山は空間移動者！早沢は赤毛のチビ担当！！」

「させねえよっ！」

黒田が着地と同時に素早く茜に殴りかかる。

茜は氷の壁を作り、それをガードしようとする、

と、氷の壁が現れた瞬間に黒田は自身の軌道を変えて、茜の後ろに回りこんだ。

ちっ、人だけでなく物体全ての位置を把握するタイプ、厄介な敵……！

黒田の正拳が茜を襲う。

当たる直前に見えない壁のようなもので黒田の正拳は止められた。

念動力者か…！
テレキネシス

「峰岸、読む相手を切り替えろ、新山とかいう女だ！」

「了解です」

「早沢！その赤毛と念話能力者テレパスのやつを近づけさせるな！」

「…貴方の赤い髪がより赤く染まる」

そう呟くと舞理は短刀を抜いて、そのまま峰岸へと突っ込んだ。

「美沙ちゃんの存在忘れてもらっちゃ困るんですけどっ！」

美沙が叫ぶとそのまま舞理の真横へとテレポートする。

同時に後ろ回し蹴り。

舞理はそれを避けると短刀を振り上げた。

が、それは虚空を切り裂く。

既に違う場所へとテレポートした美沙が
凍りついたフォークの中身だけをテレポートさせて舞理を襲う。

フォークがテレポートしたとほぼ同時にフォークは見えない衝撃によって吹き飛んだ。

「あんだこそ、私の存在忘れるんじゃないわさ、私のラブコール、まだ受け取ってもらってないわさよ」

若干離れた位置から春菜がニタリと笑った。

不味いわね、思ったよりもこいつら、ずっと統制が取れてる…

動きも素人のものじゃない。

少なくともこの男と空間移動テレポータの女はジャッジメントクラスの運動能力を持つてる。

ドドドドッドドドッドドドッ！

ミセの持つマシンガンが火を吹いた。

全ての弾が茜に着弾する寸前で氷の壁に阻まれた。

「早沢！標的変更、金髪のマシンガン女をやれえ！！」

「…能力把握、墮落した鰻が一匹」

舞理の眩きと共に茜はミセの能力を素早く理解した。

こいつは電気系統の能力者。鰻は電気の暗示。墮落は異能力者（レベル2）。

これだけのやつらの中で明らかにこいつだけレベルが低い。

つまり…こいつらの狙いは機関潰しそのものではなく、この女の絶対死守…！

「峰岸、ミセを守れ！」

黒田が叫びながら舞理を追った。

させるかっ…！

茜は黒田の足元に氷の塊を出現させるが

黒田は出現ポイントを把握、それを飛んで回避した。

そのまま舞理を追う。

こいつを足止めは難しい、なら私が直接あのマシンガン女を…

茜が足を速めてミセの方へと向かう。

ミセはマシンガンを乱射するも全て氷の壁に阻まれ、当たらない。

「させませんよ！」

茜の目の前に舞理の追撃から逃れた峰岸が現れた。

「邪魔よ！赤毛チビ…！」

右手に氷の長剣を作り出し、そのまま横に揮う。

峰岸はそれを『読んで』攻撃を避けた。

避けた…！？読まれたにしたってハンパじゃない運動神経、こいつもジャッジメントクラスの使い手！！

だけど、ね！

「……しまっ！？」

峰岸が読んだ次の攻撃は回避不可能なものだった。

無数の氷柱をオールレンジから飛ばす。

一撃一撃の威力は小さいが確実に足止めが出来る攻撃。

その光景をミセはただ黙って見ていた。

脳裏に浮かぶのはこの2日間の思い出。

ミサカネットワークから自らを遮断して、自分の考えだけで動いた2日間。

そこには確固たる妹達シスターズじゃない、自分自身が存在したはずだった。

守られてばかりの自分は何故かとても嫌だった。

今、この人たちを守らないと、私は私じゃなくなる…そんな気持ち
がミセの中に溢れ出した。

ミセは強い意志の光が宿る眼差しと共にマシンガンを投げ捨て右
腕を前に突き出した。

バチツという火花が奔った瞬間、凄まじい電撃が氷柱の一部分を
氷解させた。

「…なっ!？」

バカな…あの女は異能力者（レベル2）のはず!？

今の電撃は間違いなく大能力者（レベル4）クラスはあった。

「ミセ…?」

黒田も驚いたようにミセを見る。

春菜と美沙も同様にミセを見た。

峰岸が出来た脱出スペースから逃れるとやれやれと言った感じで
呟いた。

「何がきっかけかは知りませんが…どうやら彼女は化けましたね」

「化けた…ですって？」

「能力開発のカリキュラムを受けたものなら知っているはずですが、
パーソナルリアリティ己の自分だけの現実と

向かいあえた者は爆発的にレベルが上がることもある、と、常識です、ねえ、雅さん？」

「……………」

雅は少し困った顔をすると言葉にならない言葉を上げて小さく頷いた。

厄介な…と茜は思う。

ただでさえ、厄介な能力が揃ってる上に、攻撃要因が敵に増えたことになる。

「これからは私が、私の意志で、みなさんを守ります、とミサカは確固たる自分の意思で伝えます」

ミセはそう言うのと再び茜に対して右手を突き出した。

「お姉様には遥か及ばないですが…！」

ドガシャアアアアアアアア！！！！

という爆音と共に電撃が放たれた。

「辭氏！」

春菜が焦ってテレキネシスによる磁場を張る。

電撃は磁極によって磁場が捻じ曲がり、茜の左右を翳めた。

「あら、今度は美沙ちゃんを無視？」

隙を逃さず、美沙の横蹴りが春菜の腹にクリーンヒットした。

「ぐあっ！？」

新山っ！…ちっ、不味い、体勢が崩され…！？

「遅い！」

茜が春菜の助けに入ろうとした瞬間に黒田の下からの突き上げが茜を襲う。

辛うじて茜はそれを避けると転がるように春菜の側へと寄る。

「新山、この部屋を吹き飛ばせ、一時退却、作戦を練り直すよ」

「…げほっげほっ、わかったわさ」

「早沢あ！但野あ！逃走準備！！」

茜の叫びと同時に峰岸と戦っていた舞理が、

琴音（天音）と戦っていた雅が一気に距離を引いた。

「逃がすと思ってるのかしら！？」

追おうとする美沙を黒田が制止する。

「敏水！？何で止めるの！！？」

「俺たちの目的はあいつらを潰すことじゃない、目の前の敵にかまけて本来の目的を見失うな」

制止する黒田の言葉に若干茜が笑みを浮かべる。

「頭のいい男、嫌いじゃないわ、
また戦場で会いましょう、あんたら潰さないと私たちもギャラ貰えないしね」

そう茜が言うとはほぼ同時に部屋が大きな振動を始める。

” 美沙、全員を部屋の外へテレポートさせろ ”

琴音（天音）の通信が入り、美沙は悔しそうに茜たちを見つめながらテレポートした。

次の瞬間、部屋の床が捲れ上がって天井も粉碎される。

高波に乗るかのように茜たちは鯨棋院機関を脱出した。

パーソナルリアリティ（後書き）

集団戦闘は難しい… or z

それぞれの戦う理由（前書き）

初めて押し絵を付けて見るテスト。

そしてそれが主人公ではなく敵役のリーダーというとてもない畏

ww

それぞれの戦う理由

鯨棋院機関・実験棟第2施設

研究員の喉下をがっちりと掴んだまま峰岸は淡々と話した。

「さあ、話してもらいますよ、実験に関わっている上層部、その全てを…ね」

小さな体のどこにあるのかという力を込めて、ぎりつと研究員の首を絞める。

「ぐっ…じ、実験のことを…話したら、俺、が、殺され…」

「例えばさあ、美沙ちゃんテレポータの能力は空間移動なんだけど、貴方の体をこのままあの石柱の間に挟めるように移動させることも可能なんですけど」

美沙の言葉に研究員は言葉を失って青ざめる。

「あ、あのお、立水先輩、そんな過激な…」

オロオロと琴音が美沙を止める、
が美沙のイライラはアイディアの面々を逃したことにより極限まで高まっていた。

それは峰岸も同じだった。

「今、ここで死ぬか、後で逃げ延びれる可能性を求めて白状するか、

貴方に与えられた選択はこの2つです」

峰岸の言葉は容赦ないほど冷酷で、残忍で、一切の妥協をしない。

「わ…わかった…はな…す」

その研究員の言葉に峰岸の手が研究員の首から離された。

黒田は今、ここにいない、ミセと共に外に出て周囲を見張っている。

だからこそ、美沙と峰岸はこのような強硬手段で聞き出すことにした。

黒田がこの場にいれば恐らくは止められたであろうこの方法で。

研究員から全ての顛末を聞きだすと峰岸は携帯を手を取った。

「天井亜雄…？」

『はい、その男が実験の中枢のようですね』

「それは、いい知らせだ、が悪い知らせもある」

『悪い知らせ?』

「御坂からの伝言が入ってた、もうこれ以上はいいから、迷惑をかけた、とだけな」

『…まさか』

「…ああ、俺たちの勘が正しければあいつ…死ぬ気だ、一方通行と戦ってた」
アクセラレータ

『時間との戦い、ですかね、僕たちが天井とかいう男を潰すのが先か、御坂さんが死ぬのが先か』

「だな、いよいよ時間が無くなってきたわけだ」

そついうと黒田は夕暮れに近い空を見上げる。

先走るなよ…御坂。

「実験に関して全て教える…だと？」

「そうよ」

「ふざけるな、部外者にそう易々と教えられる実験だと思っているのか！？」

研究員の激昂した姿にも微塵もたじろぐことなく茜は腕を組んだまま仁王立ちをする。

「敵は想像以上に手強い、確実に仕留めるためには情報がいる、それだけ」

「そこを何とかするのが貴様らの仕事…！」

そこまで言ったところで研究員の手のひらを一本の氷柱が貫く。

「ぐっ…ぎゃあああああああああああああ！！！」

悲痛な研究員の叫びが轟いた。

「あんたに拒否権は無いんだよ、能力も使えない、やれることは学園都市の人間をモルモットにして遊ぶクズが！さっさと喋りなさい、今私は負け戦の後で気が立ってんのよ」

研究員が残った手でそつと差し出したポケコンを踏んだくように受け取ると茜は中身を確認する。

「絶対能力進化実験（レベル6シフトけいかく）…？
第1位の人間を絶対能力者（レベル6）に進化させる計画…！？」

全てデータを読み終えると、茜はポケコンをそのまま叩き折った。

「ふざける…！こんなことに私たちは加担してたの！？」

「く…くくく、もう遅い、貴様らが離脱しようが止めに入ろうが、もう遅いんだよ、実験はすでに半数を切り替えしている、学園都市の『闇』については貴様もよく知ってるはずだ、貴様らに出来ることは仕事を続けるだけだよ、アイディアのリーダーさんよお…！」

研究員の叫びはそのまま最後の言葉となった。

一本の鋭い氷の刃が研究員の喉下を貫いていた。

氷の刃から夥しい量の血があふれ出す。

> i 8 9 9 1 — 1 3 5 4 <

研究員は一言発する間も無く地面へと沈み込んだ。

「やるわよ、仕事だもの、やらなきゃ金はもらえない、金がなければ私の目標だって達成できない」

茜は下を向いていてよく表情が掴めない。

「自分のためとは言え…他人の使命を阻むのは何時だって嫌な気分だわ」

そう呟くと茜は研究所を出る。

研究所の外には3人が待っていた。

「わかったわさ？」

「ええ、恐らく次は本命のところに出る、その前にあいつらを潰すわよ」

「一日に3件も仕事があるとは思わなかったわさ、それも3件とも同じ標的なんて」

「どれもこれも運命という星の名の下に」

「早沢の言うとおり、あいつらは私たちの敵、

どんな理由があろうとそれは変わらない事実だし

これを成し遂げなければ金は入ってこない、だから、やるよ」

「辭氏…弟のこと…だわさ？」

「余計な詮索するな、新山、問題ないわよ、やるわよ、

私は、何だってやる、そのためにこんな下らない組織に属してるんだからね」

「……………」

雅が心配そうに茜を見つめる。

「大丈夫だって、但野だって理由があってアイディアに所属してるんだろ？」

「だったらそれはプラスにはなれどマイナスにはならないわよ」

雅は茜の言葉に少しだけ微笑むと微かに頷いた。

茜の表情が険しいものに変わる。

「行くよ、研究員のデータでは第3位が暴走して第1位に突っ込むらしい、

その前にあいつらを潰さなきゃ私らに金は入ってこない、時間との勝負よ」

「OKだわさ」

「3度目の正直…奇しき縁はここで断ち切る」

「……………」

それぞれの思いを胸にアイディアの面々は目標の場所へと向かった。

夜・天井亜雄の居る場所に向かう途中で二組のグループが向かい合った。

「そこを退ける気は無いんだな？」

「生憎だけど、こっちも仕事でね、潰させてもらっわ、あんたら」

黒田の問いに茜が間髪入れずに答えた。

「その表情・・・貴様らも実験について知ったな、知ってて加担するのか？」

黒田の言葉に若干、茜の顔が曇る。

「頭がいい男は嫌いじゃないって言葉、訂正するわ、あまり切れる男は苦手だ、私」

「時間がない…力ずくでも通させてもらっ」

「結構、遣り合いましたようか、お互いのために」

そう言つと茜は能力を発動した。

5人の足元に巨大な氷の柱が突き出す。

峰岸はそれを正確に避けると読むターゲットを茜に設定した。

美沙はミセを、黒田は琴音を抱きかかえるように真横に飛び、氷

の柱を避ける。

ミセが美沙に抱きかかえられたまま、茜に向かって右手を突き出して稲妻を発した。

茜は氷の段を無数に作り出して、稲妻をガードする。

砕け散った氷と散開した稲妻との間から春菜が飛び出して峰岸に向かって攻撃を繰り出した。

峰岸は春菜の鋭い手刀をギリギリで避けるとそのまま春菜の耳元で囁く。

「成る程：あの人の目的は病気の弟さんの治療費、ですか…」

春菜は峰岸の言葉に激昂する。

「勝手に辭氏の心ん中読んでんじゃないわさ！この赤毛！！」

くるりと反転してそのまま後ろ回し蹴りを叩き込む。

衝撃波のオマケ付きで。

「…ぐっ！」

何とかガードしたものの峰岸はそのまま後方数メートル後ずさる。

雅が美沙へと近づく。

美沙は雅の後方にテレポートする、
が雅は美沙の位置を『1次元上に移動する美沙を的確に横目で
追いつながら』

後方へと体をずらして拳を繰り出した。

見た目に反した相当重い打撃が美沙の左腕を襲った。

美沙は左腕のに受けたポイントを抑えながら今度は雅自身の体を
自分の目の前に移動させる。

「……………！」

「他人の動きは見えるみたいだけど…直接自分が移動するってのに
は慣れてないみたい、ね！」

美沙は言いながら的確に雅の顔面を蹴った。

雅は咄嗟に両腕をクロスさせてガードする。

”ミセ、私から離れるな”

琴音（天音）が舞理と戦いながらミセに念じた。

「私も戦えます、とミサカは貴女を全力でサポートします」

そう言つとミセが体中から電撃を迸らせる。

舞理はそれを飛びながら避けると琴音（天音）に向かって短刀を投げつけた。

琴音（天音）に当たる瞬間、

ミセによって発せられた電磁の磁場によって短刀は軌道を変えて琴音（天音）の顔の横を通る。

舞理はそれを見て少しだけ、舌打ちをした。

黒田と茜が対峙する。

「理由は聞かない、そっちにはそっちの都合があるんだろうし、こ

「うちにはこっちの都合があるしな」

「それでいい、私たちは敵同士、下らない馴れ合いなんて真っ平ぐめんだわ」

そう言つと茜は両手に氷の剣を作り出す。

「あんたに遠距離攻撃や小細工は通じない、なら正々堂々、正面から勝負よ」

「惜しいよ、その性格、出会いが違いばいい友達になれそうだ…」

「…同感、よ！」

茜はそう叫ぶと氷の剣を黒田に振るつた。

それぞれの戦う理由（後書き）

どっちが悪役なのかわからなくなってきたorz

決着（前書き）

最終話

決着

茜が振るった剣は空を切裂いた。

反応出来ないスピードじゃない…！

黒田がそう思ったまま、そのまま後ろ回し蹴りを叩き込む。

蹴りは茜の顔面近くで氷によって阻まれた。

この能力…

「お前…アイシクルマスター氷結能力か」

茜は黒田の言葉に少しだけ笑うと

「あんたこそ、その無駄の無い動き…ただの一般人とは思えないわね、どうも」

黒田も茜の笑みに笑みを持って返す。

「俺は…ジャツジメントだ！」

そう言うつと黒田は茜に向かって突っ込んだ。

右正拳が茜の顔面を捉えかける。

寸前に氷の壁が出現してそれを阻もうとしたが、

それを読みきって黒田は拳を寸止めすると流れるように足払いをかける。

「…ちい！」

茜は尻餅をつく間も無く左手を地面に添えるとそのまま冷気を放出して後ろへと跳んだ。

「俺も問おう、お前は何だ？」

アイディアとは何だ、その動き、能力、ただの一般人じゃないことは見て解る」

「さっきあんた自分で言っただしょ、

私には私の都合があるし、あんたにはあんたの都合がある。

今ここであんたに私の都合を話したらそれで私は救われるのか？」

「闇雲に一人で全てを抱え込むよりはマシだ」

黒田の目が茜の目を捕らえる。

「…私には私の仲間がいる！それで十分だ、あんたはいらないんだよ……」

そう言つと茜は自身の周りを急激に冷却させた。

温度差によって場に濃い霧が生じる。

「……………っ！」

しまった…この霧…俺の能力封じが狙いか！？

「あんたは物や人の位置をよく知ることの出来る能力らしいね、それも大能力者（レベル4）。

一粒一粒の水滴まで見極めるんだろ？」

「くっ！」

黒田は茜の前へと走った。

霧状の水滴が同時に黒田を襲う。

一撃一撃はとても軽いが絶対に避けられない攻撃方法。

氷柱のように大きなものなら黒田は避けられる、が

霧レベルの細かさ、密度までいけば流石に避けられない。

ダメージは大きくないが、確実に仕留める方法を茜は選択した。

だが、黒田の足は止まらない。

いくら無数の水滴が自分の体に穴を穿とつとも、決してスピードを緩めないまま

ただ真っ直ぐに茜を目指す。

黒田の能力はただ物と人の位置を知ること。

付随して生命力の多可を判断出来る、が言ってしまうえば戦闘向けではない。

そのことは黒田自身が一番知っていた。

だけど黒田は風紀委員^{ジャッジメント}になった。

能力が評価されバックアップ要因に回されることが多かったが戦闘訓練を怠ったことなどただの一度もない。

全てはこの学園都市に住む人を守るために。

あの一般人と同じ位置に立つために…。

黒田の数多ある経験が言っていた。

この攻撃では俺は倒せない、と。

だから走る。

茜までの距離はおおよそ約3メートル。

茜は近づいてくる黒田を見てニヤリと笑った。

右手の指先に氷で出来た爪を作り出す。

私はこいつを…待っていた。

弟のためとは言え、出してはならない領域に、学園都市の『闇』に手を染めた私を倒してくれる。

茜の弟は病だった。

決して治療不可能な病気じゃなかった。

問題なのは莫大な治療費。

その値段は茜の想像を絶した。

途方に暮れていた茜はある日、
黒いスーツの男たちに囲まれて

『アイディア』と言う組織のリーダーをやらなにか、と誘われた。

聞けば聞くほど馬鹿馬鹿しい組織。

風紀委員では対処出来ない連中の始末。
ジャッジメント

警備員では出勤出来ない事件での後始末。
アンチスキル

自分が思っていた学園都市という理想郷は
そこには存在せず、ただターゲットを始末する日々が続いた。

始めたころは「始末」が終わった後に嘔吐と涙が止まらなかった。

でも、それ以上に「上」から提示されるギャラは茜にとって魅力的で

自分が負い目を負うことで弟が助かるのなら幾らでも負い目を負
おうと思っていた。

どんな経緯かは知らないけどいつの間にかアイディアは4人にま
で増えていた。

初めはみんな嫌いだっただ、どいつもこいつもロクな理由もなく来る仕事を始末する。

ある日、茜はカマをかけた。

予想では

「そんなんでも悩んでるなんて馬鹿みたい、すぐ辞めればいいじゃん、アイディアはうちらが継いでやるよ、リーダー」

とかそんなだろうと思ってた。

でも、あいつらは本気で、涙を流してくれた。

予想は裏切られた、いつの間にか4人で仕事をするのが楽しくなっていた。

悪いことをしているはずなのに、人を殺して金を貰う最低の仕事のはずなのに。

何時からか茜の耳に風の音が聞こえ始めた。

風は声となって茜を苦しめる。

「ヒドイヨ……」

「ドウシテオレヲコロシタんだ！」

「ワタシハ、グウゼンシツタダケナノニ……!!」

「ヤメテ……!!」

声に脅えながら茜は仕事を続ける。

目的が変わっていた。

何時の日か、私を返り討ちにしてくれるやつが現れて…私を殺して。

茜の根本の願い。茜自身が気付いていない本当の願い。

だから茜は右手を振るう。

全力で、黒田の顔面に向かって。

黒田もクロスするように右手を突き出す。

「辭氏!!」

遠くから春菜の叫びが聞こえた。

ドゴオッ!!

黒田の正拳は茜の左頬にクリーンヒットし、
逆に茜の爪は黒田の左頬を掠めるように多少切裂いた。

[illegible]

春菜が無我夢中で茜の下へと駆け寄ろうとする。

が、その手を峰岸が掴んで小さく首を横に振った。

茜はぐるぐると回る空を見上げながら、ただ笑っていた。

「.....」

「あん？」

黒田が茜の側に近寄ると聞き耳を立てる。

「殺して」

茜の言葉に身を竦ませるアイディアの三人。

黒田はその言葉に大きく溜め息をつくと言。

「やだね」

と吐き捨てた。

「それが私の願いなのよ、あんたたちを潰せない以上、きっとこれ以上仕事は回ってこない、ギヤラも回ってこない、弟は助からない、『闇』を知った私もいずれは殺される、
ならいつそこで死にたい」

黒田は倒れこんだままそう言って自嘲する茜を睨みつけると眉間に皺を寄せて叫んだ。

「誰がそれを決めた！？全部憶測で物を語ってんじゃねえよ、弟が助からないとかギヤラがどうかそんなことは俺は知らないし知りたくもない、
だがよ、お前が死んだらその弟は泣くんじゃねえのか！！？」

「……………！」

不意に茜の脳裏に弟の顔が過ぎる。

今年でまだ小学2年になったばかりの弟。

学園都市に来ていないから学園都市の医学は受けられない。

故に莫大な治療費が掛かる、

親もサジを投げた、ただ一人の弟の屈託の無い姉に向けられた笑顔が。

年に一度、所定の手続きを踏んで家へと帰り、
弟の顔を見ることだけが茜の生きが이었다。

だから、脳裏に浮かんだ弟の顔が何よりも辛くて、それが笑顔だったのが、泣き顔に変化していく様が耐えられなくて。

茜の目から一滴の涙が流れ落ちた。

顔は笑ったままに。

「諦めてんじゃねえよ、この一件に片が付いたらお前の事も何とかしてやる、

俺はジャッジメントだからな。

学園都市の困ってる人間を救うのがジャッジメントの……いや、俺の使命だ」

「この街の抱える闇は…ハンパじゃないわ、よ」

「そんなもの、この実験を目にしたときから覚悟してる」

「ジャッジメントでいたら守れないものだってあるのよ」

「それならジャッジメントなんて辞めてやる、

俺はジャッジメントだからこの街やミセを守ってるんじゃねえ、

俺が俺であるために、俺が何であるかを貫くために、俺はこの街に住む人を守ってるんだ」

茜はその言葉を聞くと瞼の上に手のひらを乗せ、顔色が解らないようにしたまま、盛大に笑った。

「ハハハハハハハハッ…！」

「………こんな下らない街にまだこんな考えしたやつ、いたんだ」

「第7学区に来てみるよ、いっぱいいるぜ、俺みたいな考えのやつ」

「……………そうね、ゆっくり人見物もたまにはいいかしら、
もう何年も人を観察するなんて、してないわ」

そう言つと茜は瞼から手を離してゆっくりと地面へと手を落とす。

眩暈はいつの間にか無くなっていた。

夕闇に浮かぶ月がやけに大きく感じた。

「……………終わったようですね」

二人のやり取りを見て峰岸が春菜の手を離す。

「これで、良かったわさ……？ 辭氏……」

春菜は手を胸に当てて、そう呟いた。

「敏水、ケリが付いたなら行きましょうか、天井のところに」

心配そうに茜を見つめる雅を横目に美沙が言った。

「ああ…行つていいな？」

黒田が茜に問いかけると一言だけ「好きにしま」ただけ返つてきた。

黒田はその言葉を了承と捉えるとミセの方へと向く。

「行くぞ、ミセ！」

「は…い？」

ミセがそう言つて頷こうとした瞬間、ミセの脳内に強制コードが展開される。

何でしょうか、とミサカは疑問に思います。

ミサカネットワークは自身の意思で切り離しているはず…？

固体番号200001号からの強制接続…？

ミセの脳内にけ救急車のサイレンのように繰り返し言葉が響き渡る。

『全ミサカはただちに付近にある風力発電装置のプロペラを動かしてください、

とミサカ10032号は懇願します、

尚この懇願は20001号を通して、接続を切っている全てのミサカにも伝えます、

今の状況とミサカの今を』

その言葉と同時にミセの脳内に浮かび上がる映像。

黒いツンツンヘアの男が白い華奢な男の前に立ち塞がっている姿。

オリジナル

美琴と10032号のミサカがその付近に立っている姿。

そして、何故その黒髪ツンツンヘアの男がボロボロの姿になっているか。

何よりオリジナルである美琴が心から妹達シスターズに願ったことが。

ミセは悩む間も無く、一番近い風力発電装置の方に手を伸ばす。

「ミセ…?」

黒田の問いにミセは少し微笑んで黒田を見ると

「天井亜雄の下へ行く必要は無くなりました、とミサカは丁寧にお礼を述べます」

「それってどういう…?」

能力を解除して眼鏡をかけ直した琴音が問おうとした瞬間。

無数の微弱な電磁波がミセの手から八方に飛び散った。

他の妹達シスターズは異能力者（レベル2）なので一人一つのプロペラが限界だ…が

ミセは大能力者（レベル4）クラスのレベルにまで底上げされている。

見える範囲全てのプロペラを同時に動かすことなど見戯に等しかった。

電磁波を受けて、プロペラはそれぞれが不規則な動きで回転し、風向きが著しく変わる。

「何が…起こってるんだ?」

「僕が説明しましょう」

ミセの心を読んだ峰岸が呟いた。

そして、数十秒後。

「一方通行の沈黙を確認しました、とミサ力は安堵の溜め息を漏らします」
アクセラレータ

とミセが溜め息を交えながら呟いた。

わつと美沙と琴音が抱き合う。

「ならこれで…」

「実験は終了、でしょう。引き上げるべき対象が最強じゃなかったんですからね」

峰岸もやれやれと言った感じで呟く。

ミセは金髪のウィッグを取ると、御坂美琴の顔で黒田たちを見つめる。

その顔を見て驚愕したのは茜たちだ。

地面にへたり込んだまま、茜はミセの顔を見て、笑った。

「…くくつ、エレクトロマスター電撃使いだとは思ってたけど、まさか実験当事者だったとは…道理であんたたちが死守しようとするわけだ」

「空回りだったようだかな」

黒田はそう言いながらも満足そうな笑みを浮かべた。

「空回りなんかじゃないさ、結果として、

あの妹達シスターズの命は助かってるんだ、1位に殺されなかっただけマシさ」

茜がそう言つと黒田は一言「そうだな」と言つた。

「長いような短いような間、皆さんお世話になりました、とミサカは心から感謝の意を申し上げます」

「もう、いいのよ、ミセちゃん、そんなことよりさ、打ち上げしよっか、どう？あんたらも来ない？」

「え、いいんだわさ！？」

「こらこら、新山、そこまで慣れあうんじゃないわよ」

「打ち上げならファミレスで！

今度こそハバネロトウガラシパフェ！地獄の血の池地獄！を！！」

わいわいと盛り上がる面々を見て少し寂しそうな笑顔を作るミセ。

「残念ですが、ミサカは行けません」

「え、なんで！？」

驚く美沙にミセは説明を続ける。

「ミサカは培養液の中で強制的に育てられて、ごく短期間の間しか生きられないように調整を受けています」

「…そんな!」

口元に両手を当てて驚愕する琴音に対してミセは小さく首を横に振る。

「だから、『生きる』ために、ミサカは帰ります、残った研究施設に行けばデータとクローンに関するノウハウで寿命を引き伸ばす方法があるはずですから、とミサカは諦めてはいないことをここに宣言します」

そのミセの言葉に黒田は頷くと

「伸びるといいな、寿命」

と言った。

「はい、今、私の案が全てのミサカに伝わりました」

「こんな言い方は変だけど、楽しい数日だったわ、美沙ちゃん的には本当に妹が出来たみたいで」

そう言いながら美沙は笑って右手を差し出す。

ミセは黙ってその手を握り返した。

「さようならは言わないからね」

「ええ、また今度」

そう言つとお互いに手を離してミセは走り去った。

「…止めなくて、良かったんですか？」

峰岸がポツリと呟く。

「あいつが自分で決めたことだ、誰の意思でもなく、自分の意思で…な、それを止めるのは野暮つてもんだろ」

そう言つと黒田は肩を竦める真似をする。

「じゃあ、ミセちゃんが帰ってきたら、絶対にファミレス、行きましょうね!」

琴音が両手を合わせて名案とばかりに言つた。

「ああ、そうだな、その時はお前らも、来るか？」

そう言つて黒田が茜たちを見る。

茜は少し俯いて

「考えておく」

とだけ言った。

二日後。

「あら、復帰しましたの？」

第177支部に黒子がやって来ると黒田の姿を見つけてげつと唸った。

「そんなに仕事が欲しいのか、白井？」

「い、いえいえ、わたくし、心から先輩の復帰を待っていたのですよ、これ本当」

「見え透いた世辞はいいから、とっとと見回りに行け、バカ」

「はいはい、白井黒子、見回りに行つてきますの！」

そう言つと黒子は扉からUターンするように出て行った。

「なんだあ…？やけにハイテンションじゃねえか」

「ふふ、何でも愛しのお姉様が元に戻ったらしいわよ」

固法が片手に書類を持ったまま微笑んだ。

「ふうん」

その言葉を聞いた黒田の顔にも自然と笑みが零れていた。

決着（後書き）

ここまでお付き合いありがとうございました。
また次回作があればお目にかかりましょう。
では^^^／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9402/>

とある何処かの学園都市（サイバーシティ）

2010年10月11日04時02分発行